

99 PREGUNTAS BÁSICAS SOBRE EL ISLAM

イスラームへの 99 の質問

Abdelmumin Aya アブデルムミン・アヤ

Bismil-lāhi r-rahmani r-rahīm

PRÓLOGO はじめに:

التمهيد

本書は、5 年間にわたる「ウェブイスラム (Webislam)」での掲載内容の集大成にあたります。この期間にウェブイスラムに寄せられた質問は、誇張なしに何千という数にのぼりました。そのため質問は大きく二つのグループに分け、第一部はイスラームについて物議をかもしているテーマや質問について、第二部はさらに本質的で率直な質問に答えていきます。また、非イスラームとは何かをお話した上で、イスラームの精神について説明したいと思います。イスラームのシャハーダ (信仰告白) では、まず「ノー」と虚像を否定し、そして「イエス」とアッラーを肯定しますが、本書も同じように展開していきます。

イスラームを語ることを通じて本書が伝えようとしているのは、質問の回答そのものではなく、扉を開けて私たちが生きる世界の空気を入れかえ、シンプルに生きることが大切だということです。それにより自分が生きていることを本当に理解するようになり、そして一人ひとりのイスラームが始まります。イスラームとは根本的に、ものごとくに捉われすぎないということです。ムスリムの人々は、万物に自然な調和を見出すことにより、日常生活に樂園を創りだします。イスラームとは自分を解放することであり、何かの教理の信者のようにひとつの考えに束縛されることではありません。

イスラームに関する質問そして回答は数多くありましたが、最終的に明らかにしておくべき唯一の点は、イスラームとはひとつの生き方に過ぎないということです。ムスリムの人々にとって、アッラーとは私的領域に属すのではなく、ものごとの営みに関わる存在です。そしてイスラームは人生からかけ離れたものではなく生きている事実そのものであり、すでに存るものなのです。ムスリムは一生をかけて、それが意味することを見出そうと努めます。イスラームとは、それを通じて真の意味でこの世界に身を置くことが可能になるものです。ムスリムの人々の精神性は、四次元世界へのトリップではありません。それは、

世界は単なる平面ではなく、そこに潜ってより深く生きられることを理解し、帰依をする人々が抱き続ける情熱なのです。

あるハディースによれば、預言者ムハンマドは「この宗教は確固としかつ強靱だ。心を静め、そっと入っていきなさい。」といました。私たちもこの道にそっと分け入っていきましょう。イスラームは、道を辿るために必要な明かりをかざしてくれることでしょう。

イスラームに改宗した私たちスペイン人のムスリムの多くは、何世代もの間、隣国モロッコのムスリムの形式を真似る誘惑にかられる一方、キリスト教のカトリック的な神学を用いて私たちのイスラームに説明を与えてきました。そしていつしか、私たちのイスラームはこの土地に端を発した固有のイスラームであり、独自の道を切り拓いて発展するものと捉えるようになりました。私たちはこの流れに身を任せることにします。人間がイスラームを定めるのではなく、イスラームが人間を導くのであり、どこへ行くのかは誰にもわかりません。私たちの歩むべき道は、偶像崇拜という嘘をなくしてゆき、神のみが知るどこかへ向かうことです。ムスリムは、変化や流転や思いがけない出来事を、それが人生の在りようだとして受け入れます。なぜなら、流れに身を任せた瞬間から、ものごとくに被さっていた覆いを取り除かれていくからです。

イスラームとは、すべてを流れに任せ、アッラーの為すままに任せることです。自分が主役となる出来事についても、コントロールしようとはしないことです。その出来事に目的はありません、なぜならアッラーは目的を持たないからです。ものごとの存在に理由や背景などはありません。

私たち人間は、アッラーへの扉の前にいます。そこではアッラーに何かを求めたり利益を考えたりせず、自分の欲するものではなくアッラーそのものを見出そうと努めるべきです。アッラー、その存在がいかなるものかは知りえないとしても、その壮大なる存在は私たちの内的世界に道を拓きます。何かを願い、それをアッラーに望んだとしても、その願いが本当に自分を満たすものかどうかはわかりません。むしろそれは、自分にとって本当に必要ではないかもしれません。だとすれば、他のものや人物に対して、自分の欲求を満たしてもらおうよう望むべきです。アッラーは、人間が自分に必要だと思い込んでいるものを満たすのではなく、人間に意識されないものの、真に必要としているものをお与えになります。

イスラームとは、人々を奴隷化してしまう虚構や、世界と人間との関わりを歪めてしまう虚構を排するための努力です。イスラームは生きること、目覚めていること、存在することです。なぜなら存在はアルハムドゥ・リッラー（神のおかげでの意）だからです。人間は、この世界と人間との間になんと多くの言い訳や嘘、ものごとを覆い隠すベールを置いてしまったことでしょう。アッラーを受け入れることは、私たちを現実から遠ざけて「全なる存在」との一体化を阻む存在である、虚像や偶像を排していくことです。

Wa l-hamdu li l-lâhi rabbil 'âlamîn. (「讃えあれ、アッラー、万世の神」クルアーン開扉の章より)

PRIMERA PARTE 第一部

1. イスラームでは女性器の切除が認められていますか

イスラームでは女性器切除または陰部封鎖は、男性あるいは女性に対する割礼と同様に、全面的に禁止されています。クルアーン第4章119節で、シャイターン（悪魔）が「その者どもだけはかならず迷いの道に誘い込み、その胸に邪曲な欲情を煽り立て、そして彼らに号令して、アッラーの創り給うた秩序を変えさせてごらんに入れましょう。」といったとされています。どんな方法にしても、女性の陰部封鎖は割礼ではなく、女性に対する去勢行為にあたります。

「割礼」という言葉とその概念が意図的に歪めて使われ、ユダヤ教で男性だけに行われる宗教的伝統と紛らわしくさせられているようです。イスラームでは、法律学校でもハディース（預言者ムハンマドの言行録）やスンナ（預言者ムハンマドの言行・慣例）にも陰部封鎖に関する言及は一切なく、また預言者ムハンマド（彼の上に祝福と平安あれ s.a.s.）もそれを行ったことはありません。一方、女性器切除や陰部封鎖は人類学者や民俗学者にとっては珍しい現象ではなく、こうした習慣は三千年以上も前から存在します。これらはイスラームとは宗教や習慣もかけ離れ、地理的にも遠いエチオピアやスカンジナビア、ミラネシアで行われていました。

女性器切除を行うこれらの国々の中でもエジプトには興味深い例があります。前述のようにこの習慣はイスラーム発生以前から存在しますが、実際に、エジプトで発見された紀元前 2000 年の女性のミイラに性器切除の跡が見つかり（クリトリスとその周辺、小陰唇、大陰唇の摘出）、この習慣の起源は古代エジプトにまで遡ることがわかっています。現在も、エジプトの農村地域では女性の 80% が性器切除をしており、1 日あたり約 365 人の女性に手術が行われています。その中にはムスリムの女性もキリスト教の女性も含まれています。近年、決定を決して覆さないことで知られるエジプト最高憲法裁判所でも、女性器切除はイスラームの慣習ではないということが認められました。

2. ムスリムは女性を殴ってもいいのですか

どんな状況においても女性を殴ることは許されません。預言者ムハンマドも女性に手を上げたことは一度もありません。女性への暴力がクルアーンで認められていると考える人は、*daraba* という動詞を意図的に曲解しているのでしょう。この言葉には「インパクトを与える、効果的な一撃を加える、注目を集める」に関する意味が 60 以上もあり、「鐘を鳴らす、諺に言及する、叩く、一例を挙げる、火を熾す、サラート（礼拝）を行う」などの形で使用され、*daraba* は何らかの注目を喚起することを意味します（サラート はアッラーの関心を引くこ

とを指します)。クルアーン第4章34節で使われている単語に複数の意味があるなら、預言者ムハンマドの慣行(スンナ)にもっとも近いものをとるべきであり、それはもちろん、女性に手を上げることではありません。

クルアーン第4章34節で使用されている *daraba* の語義は、さまざまな理由から「殴る」あるいは「ぶつ」とすべきではないでしょう。もっとも大きな理由は、*daraba* には「殴る」以外に数多くの意味があるにも関わらず、クルアーンの中で唯一、“どこを” “何で” 「殴る」のかが明確に示されていないということです。

クルアーンの中でこの動詞の母根 **D-R-B** が使われている部分は 58 カ所ありますが、いわゆる「殴る、ぶつ」の意味で使われているのは 12 カ所のみで、その全てで“どこを、何で”について言及されています。この中で女性に関する部分はひとつもなく、例えば「～をぶつ」という意味で使われているのは、第47章4節(首を)、第8章12節(全ての指を)、第47章27-29節(顔と背中を)、第8章50-52章(顔と背中を)です。また、クルアーンで動詞 *daraba* が出てくるときは必ず「～で、～を使って」という表現を伴っています：第37章91-93節(右腕で)、第2章58-61節(汝の杖で)、第38章43-44節(それで)、第26章63節(汝の杖で)、第7章160(汝の杖で)、第2章68/73節(あの一片で)、第2章57-60節(汝の杖で)、第38章42節(足で)。

動詞 *daraba* に前置詞 *bi* (*bi-yadihi*:手で) が伴われて「殴る」を意味するハディースがあります。このアン・ナサイによるアーイシャのハディースの部分は以下の通りです：*Mâ daraba Rasûlul-lâh, s.a.s., imra'atan lahu wa lâ jâdiman qattu, wa lâ daraba bi-yadihi shai'an qattu il-lâ fî sabîli l-lâhi aw tantahaka haramâti l-lâhi fa-yantaqima l-lâh* 「ラスルッラー(預言者ムハンマド)はどんな女性にも女召使にも決して手を挙げたことはなく、ものを叩くこともしなかった、アッラーの道と、アッラーに禁じられたハラム(タブー行為)への背信行為(ここではジハードを指す)に関する以外は」。

3. クルアーンでは姦通者に投石刑が定められていますか

クルアーンには、*çinâ* (姦通)を含めどんな罪に対しても投石刑に関する記述はありません。また、姦通について(クルアーンに定められた方法で)証明することは非常に難しく、姦通を告発したとしてもそれを立証することができない場合、告発した者に鞭打ち 80 回の罰が科されます。クルアーンによれば、姦通を証明するには現場に居合わせた証人が 4 人いること、証人は家族以外の第三者で、告発側の夫あるいは妻、告発された夫あるいは妻と親しい関係でも反発しあう関係でもない者とあります。また、女性の妊娠はクルアーンでは姦通の証明にはなりません。

当初、ムハンマドはその頃一般的だった投石の習慣を実施しにくくすることを意図していたようです。彼は決して、自白を強要された者やイスラームのシャリーア(戒律)に従う意思のある者には、投石を命じませんでした(同等の罪

に対して行われていた公開自白も廃止しました)。そして天啓が下され、それまで行われていた慣習でも天啓で認知されなかったものは、イスラーム共同体では廃止されるようになりました。ムハンマドはまた、クルアーン第 24 章 2 節に従い姦通罪が立証されたときには、鞭打ち 100 回の罰を実施したとされていますが、投石の慣習からははっきりと分けています。姦通についてイジュティハード（自由解釈）を行うこととは、クルアーンに示された姦通罪に対する鞭打ち 100 回という罰の意義を考えることであって、それ以上重い罰を考え出すことではありません。イジュティハードは人間の理性からの贈り物、そしてアッ・ラフマン（慈悲深き者、アッラーの属性のひとつ）の御慈悲であり、その目的は人間のおかれた物質的あるいは精神的状況をさらに過酷にすることではありません。これが本来のムハンマドのスナ（慣行）です。とはいえ、投石の慣習を廃止しようとしなかったムスリム聖職者にも、臆病者のレッテルを貼るべきではないでしょう（投石はクルアーンの教えとは完全に矛盾していますが）。なぜなら、当時の法習慣を変えることがどんな結果をもたらしたかは、今の私たちは知り得ないのですから。むしろ、彼らが姦通の立証方法を非常に複雑にしてくれたおかげで、投石賛成派の人々と衝突することなしに、数世紀にわたって投石が実施されずにいたのだといえるでしょう。

4. ベールはムスリム女性への抑制行為でしょうか

アラブ語の「ヒジャブ」は、「ベール」または「護符」を意味します。両者の共通点は何でしょうか、それは自分自身を保護するという意味です。私たち人間には、一見風変わりな文化的特性にその文化の思想的意味を見出そうとする傾向があります。ここでは、欧米に対して自己のアイデンティティを強調しようとする感心できない風潮からくるだけでなく、逆にヨーロッパで反イスラームの宣伝材料として利用されるアフガニスタンのブルカなど、目しか見えないアラブの女性の衣服は取り上げません。それよりもマダガスカル、エジプト、ヨルダンやインドネシアで使用されているスカーフをみてみましょう。欧米の反イスラーム宣伝が始まる以前、スカーフは男性から女性への抑圧の証だと考える女性がはたしていたのでしょうか。ヒジャブとは家父長社会の押付けではなく、ムスリム女性に与えられた権利なのです。この権利を行使したくなければ、行使しなくてもかまいません。

5. イスラームでは女性の生理をどう受け止めていますか

生理中の女性はユダヤ人の間では不浄とされましたが、ムハンマドはそのように考えませんでした。実際、ムハンマドのハディース（慣行集）には、預言者が礼拝中、跪拝のときに生理期間にあったアーイシャの膝に頭を預けたとあります。このテーマに関しては、ステレオタイプで誤った考え方が数多くあります。というのも、女性蔑視に関したあらゆることをイスラームに関連付け、イスラームが言わんとすることに心を開いて耳を傾けようとしない人々—ムスリ

ムの中にさえそうした人々がいま—がいるからです。女性が生理のときにサラト（礼拝）を行わないのは禁止されているからではなく、それがアッラーからの贈りものだからです。これと同じく、ラマダンの時期に旅の途上にある人が断食をしないのは、排除ではなく免除にあたります。旅という行いが不浄だから断食を禁止する、と考える人はいないでしょう。このように、イスラームに定められた義務は状況に応じて免除されることがあります。一般的に、女性が生理のときには性交を含めて性的関係はあまりもたれませんが、イスラームのある宗派では、生理のとき性交は行わずにとりわけ優しい態度で性的関係をもつことがすすめられています。こうしたことから、イスラームでは性交渉に対して必要以上の羞恥心をもたず、非常に寛容であることがわかります。

6. ムスリムは妻を二人以上娶れるのですか

イスラームの啓示は全ての社会や時代を対象にしているため、啓示は幅広い解釈が可能であることを考慮に入れなければなりません。例えば、戦争により男性人口が少ないといった一定の状況下では、二人以上の妻を娶ることに正当性があり、イスラームではそれが認可されています。しかし、二人以上の妻を娶ることが認められるためには、夫が複数の妻に対して同じように公平に接することができる場合、さらに第一の妻がそれを了承した場合とクルアーンにはあります。

また、クルアーンには、一夫多妻制と孤児の保護の関係について興味深いことを述べた一節があります：「もし汝ら（自分たちだけでは）孤児に公平にしてやれそうもないと思ったら、誰か気に入った女を娶るがよい、二人なり、三人なり、四人なり。」（第4章3節）。アッラーが認める多妻制は、子供を抱えた未亡人がいるような状況にある社会的要求に即しているといえるでしょう。

結婚に関する契約では、女性は自分の夫となる人に一夫一妻制を条件付けることができます。ただ残念なことに、ムスリム女性の多くはイスラームでこうした権利が定められていることを知りません。

7. ムスリムの婚姻はキリスト教徒の婚姻と同じでしょうか

イスラームにおける婚姻は「秘蹟」ではなく単なる法的契約であり、夫と妻の双方が自由に条件を加えることができます。そのため、イスラームの婚姻習慣は国により異なります。イスラームでは、意思にそぐわない結婚を女性に強いることはできません。女性の親ができることは、娘に適当と思われる男性をすすめることだけです。イスラーム社会には不安感やストレスが少ないことから離婚はあまり一般的ではありませんが、法的には認められており、場合によっては離婚が望ましいこともあるでしょう。合法とされる離婚の理由には、男性の性的義務の怠慢や、家族を経済的に支えられない場合等があります。

8. 女性を強く叱りつけるハディースはありますか

女性に関するハディースで偽造が判明したものも数多くありますが、本物のハディースに、ムハンマドが女性を叱責したことに關した記述が見つっています。それによれば、ムハンマドは同じ状況下で男性の場合に対してしたであろうやり方で女性を叱責したそうです。イスラームは、男性の好みや女性の好みに合わせて成立したわけではありません。アッラーは人間の機嫌とりなどはしません。ムハンマドは、導師として不完全な私たち人間をよりよくしようとしました。人間にはつねに向上の努力が必要だというイスラーム的考え方により、私たちの自尊心が痛みをときに覚えることもあります。ムハンマドが男性を教育するハディースが数多くある一方で、女性に向けられたハディースも多くあります。預言者ムハンマドは自分の言葉が人々に良い印象を与えるように考えることなく、ものごとを放置したりもせず、ただ導師として歩む道で出会うものに働きかけていきました。ハディースはクルアーンと同じく、人々に好かれる必要はありません。ただし決してあってはならないことは、ハディースで女性への叱責がある部分が誰かの利益 – 男性が自分たちのために – のために使われることです。

9. なぜムスリム女性は男性の半分しか遺産相続をしないのですか

あらかじめ考慮しておくべきなのは、以前、女性は遺産相続をしていないだけではなく、女性自身が相続の対象になっていたということです。そうした習慣に終止符を打ったのはイスラームでした。しかも、イスラームがもたらした女性にプラスとなる変化は、男性側との衝突を招くことでもありませんでした。また、ものごとはその内側にまわってみなければ正しく理解することはできません。非イスラーム社会において女性の遺産の受け取りが男性の半分であれば、単純に不公平にみえるでしょう。しかし非イスラーム社会では、結婚するときには男性が女性に対して持参金を支払う必要がありません。いいかえれば、イスラーム社会で息子と娘が同等に相続をした場合、娘は持参金を払う必要がないばかりか、相続した財産は自分のためにとっておき、さらに結婚相手の男性から持参金を受け取ることができるのです。明らかに、一方の息子にとっては不利な条件となります。しかも、男性は自分の稼ぎを家族と共有しなければなりません。妻が結婚時に所有していた分は個人財産であり、それを資金にビジネスを始めることもできます。そのため、イスラームのフィクフ（イスラーム法体系）では欧米と正反対の見解が示されており、持参金を考慮に入ればイスラームの女性の相続額は男性のその倍になるとさえ記されています。

また、女性がすでに経済的な自立を遂げている社会では、イスラームの改良主義が発揮されて男性の相続権と女性の相続権は同等にされています。

10. イスラームでは同性愛をどう受け止めていますか

イスラーム法学者の間では、同性愛を禁じるという全体合意がなされています。ヒューマン・ライツ・ウォッチによると、21世紀初頭の時点で同性愛が法律によって禁じられている国は84カ国あり、うち26カ国の主宗教はイスラーム教であり、その多くはアラブ連盟の加盟国です。中にはソドミー（男色、獣姦など）に対し死刑を定めている、サウジアラビア、イラン、モーリタニア、スーダン、イエメンとアフガニスタンといった国もあります。実際に死刑が適用されることは滅多にありませんが、イラン、サウジアラビア及びタリバーン支配下のアフガニスタンでは、同性愛に対し刑が執行された例があります。それ以外の地域では、同性愛は禁固または懲役刑とされています。マレーシアでは、刑法377条で「自然に反した行為」は10年以下、「男性間の性行為」には20年以下の禁固または懲役刑が定められています。パキスタンとバングラデシュの刑法では同性愛は動物性愛とされており、10年以下の禁固または懲役刑となっています。シリアとヨルダンでは5年、モロッコ、チュニジア、アルジェリア、イラクとクウェートでは3年以下の禁固または懲役です。こうした国の大半では「事実の寛容」が存在しますが、依然として法令は脅威となり続けています。

同性愛の禁止は、預言者ロトのエピソードに基づいているというのが一般的な見解です。ロトはソドムの町の住人に向かい、「お前たち、世界中の誰一人いまだかつて犯したこともないような破廉恥（男色）をしておるのだな。お前たち、女のかわりに男に対して欲情を催すとは。まことに言語道断な奴」と言ったとされています（クルアーン第7章80-81節、第26章165節、第27章55節）。

また、同性愛に関するスンナ（預言者の慣行）もあります。以下のハディースをみてみましょう（ブハーリーのサヒーフ「真正集」62巻、6-9）：

イブン・マスードは言っています：私たちがアッラーの預言者と共に戦っていたときに、仲間内に女性がいなかったため、預言者に「誰かを宦官としてもいいかどうか」尋ねたところ、預言者はそれを禁じました。

このように男色は明確に禁じられていますが、その一方で、預言者が男性間の同性愛や女性的振舞いを死刑とした例は、これまで知られている限りはありません。アブー・ダウードの「スナン」（伝承集）をみてみましょう（キタブ・アル・アダブ、41巻、4910番、4928番）

アブー・フライラは、手足に色を付けた同性愛者が預言者の前に連れて来られたときのことを語りました。預言者が「彼は何をしたのか」とたずねると、人々は「アッラーの預言者さま、この男は女の真似事をするのです」と答えました。預言者はこの事件について調べ、男はアン・ナキへ追放されました。「彼を殺さなくてよいのですか」と尋ねられて預言者は、「サラート（礼拝）を行う人を殺すことは禁じられている」と答えました。

クルアーンが啓示された頃に、同性愛は一般的に知られていたことを示すハディースもあります。そこで同性愛に対して預言者ムハンマドがとった態度がうかがわれます。「サヒーフ・ムスリム」（預言者の言行集のひとつ）の第 26 巻 5416 番をみてみましょう。

アーイシャによれば、女性のような姿をした男性がアッラーの預言者ムハンマドの妻たちを時どき訪ねていました。女性たちは性的欲望のない男性の訪問とみなして、とくに問題なくそれを受け入れていました。ある日ムハンマドがやって来ると、男性は妻の一人のそばに座り、女性の身体特徴を表現する遊びをしており、「正面からは 4 つ（のカーブ）、横を向けば 8 つ」といっていました。すると、ムハンマドは「そんなことを知っているならば、彼を家に入れてはならない。」と言い、アーイシャは「今後は彼の前ではベールを使うようにしましょう。」と答えました。

アーイシャによれば、女性的な格好をした男性がアッラーの預言者ムハンマドの妻たちを時どき訪ねていましたが、女性たちは性的欲望のない男性の訪問とみなして、とくに問題なくそれを受け入れていました。ある日ムハンマドがやって来ると、男性は妻の一人のそばに座り、女性の身体特徴を表現する遊びをしており、「正面からは 4 つ（のカーブ）、横を向けば 8 つ」といっていました。すると、ムハンマドは「そんなことを知っているならば、彼を家に入れてはならない。」といい、アーイシャは「今後は彼の前ではベールを使うようにしましょう。」と答えました。

このハディースで興味深い点は、預言者の家にも女性的な男性が出入りしていた事実や、一家の主が妻たちに今後は男性を家に上げないよう命じたにも関わらず、女性たちは男性との付き合いをやめることはなく、「彼がいるときにはベールを使いましょう」と答えるにとどめたことなどです。いずれにせよ、預言者の示した態度は、過去そして現在のイスラーム教国のそれよりもずっと寛大なものだったことがわかります。

11. イスラームで人権は認められていますか

欧米では認められていなくてもイスラームで認められている人権は数多くあります。それは、非人間的ではない社会に住む権利、他人の社会や環境の破壊に加担しない権利、不必要な消費や過剰生産を押し付けられない権利、マスメディア独占による思想統制に屈しない権利、女性の身体を商業目的に使用しない権利、などです。

イスラームでは自由に関しても大胆であり、クルアーンそのものに以下のように信仰の自由が認められています。「宗教には無理強いということが禁もつ」（クルアーン第 2 章 256 節）。

また、イスラームの国々ではムスリムであってもなくても、一人ひとりの生命と財産は尊重するべきと考えられています。

人種差別はムスリムにとって理解を超えた考え方であり、クルアーンの中では、以下のように人間の平等が認められています。

- “これ、すべての人間どもよ、我らはお前たちを男と女に分けて創り、お前たちを多くの種族に分ち、部族に分けた。これはみなお前たちをお互い同士よく識り合うようにしてやりたいと思えばこそ。まこと、アッラーの御目から見て、お前らの中で一番貴いのは一番敬虔な人間。まことに、アッラーは全てを知り、あらゆることに通暁し給う。”(クルアーン第 49 章 13 節)

イスラームでは、人権に議論の余地はありません。そして人権とはその実践、あるいは実践の努力を行うことを指します。実際、ムスリムは帝国主義的行為を行ったことも、植民地主義的行為を行うために自分たちの思想を正当化したこともありません。また、イスラームの文学では真正なる神についての議論を排し、アッラーの世界に身を委ねることを目指しています。

12. イスラーム政府には少数民族や少数派宗教の保護が義務付けられていますか

イスラームは古代アラブ民族の法規の流れを汲んでおり、もてなしの精神や敗戦者の保護も受け継がれています。氏族民は誰でも、少なくとも一時的に政治亡命者にかくまうことができ、保護を求める者には誰も近づけないようにすることができました（アル-アマン・マルーフ）。このイスラームの制度は、イスラームの国々とそこに住む非ムスリム住民（ズリンマ・アッ・ズィンマーと呼ばれる人々）の間で交わされた永久条約の中で定められました。

具体例としては、預言者ムハンマドは 631 年にナジランのキリスト教徒たちと条約を結び、キリスト教徒たちはムスリムと同じように「生命、不動産、土地、信仰、寺院そしてその他の財産」を保護されたことがあります（アブー・ユスフの著した「*al-Jarâ'y*」より）。

少数派（ズィンミー、非イスラームの異教徒）の権利の主たるものは、行政から保護と保証を受けることです。彼らへの侵害行為に対しては、それが国外からでも国内からであっても保護が適用されます。これに関しブハーリーは、預言者ムハンマドが次のように簡潔に述べたとしています：「ズィンミーに仇なす者は私の敵である。私に敵対するものは、復活の日にあの方に敵対するであろう」。また、預言者ムハンマドは、「私はアッラーに告発するだろう、私と契約を結んだ者に不正をはたらく輩を、その人の権利を侵害する輩を、その人の能力を上回ることを強要する輩を、その人の同意なしにその所有物を奪う輩を。」（アッ・スナン・アル・クブラ）と述べています。

少数派は、生命の保護とともに身体の安全も保証されており、イスラーム法学では彼らが専横や虐待行為にさらされることであってはならないとしています。ムハンマドの古い同志だったハキム・イブン・ヒシャムはシリアのアレッポで、収税官に税を払うために炎天下で待っているナバタイ人を目にしました。ハキムは、「これはどうしたことだ。預言者ムハンマドは、この世で人を苦しめるものをアッラーは苦しませるだろうと知っているというのに。」と言ったとされます。（ムスリムによるハディース）

収税官のアリーは、収税担当の一人に命じました。「彼ら（ズインミー）の税を集める際に、冬に衣類を差し出させたり、食料や仕事に必要な動物を持ち去ったりしてはならない。金のことで誰かを殴ってはならない、支払いを拒否されても強要してはならない。税の代わりに財産を売り飛ばしてはならない。クルアーンには、相手が差し出すのに困らないものを受け取るようにとある。私の命に反するなら、私よりも恐れるべき存在、アッラーを思え。お前が不正を働いたと耳にすることがあれば、お前を免職にしよう」。すると、収税官は「そんなことが起こったら去ると同じようにまた戻って来よう。」と答えました。それに対しアリーは、「戻ったと同じようにお前はまた去っていくだろう」と答えました。（イスラームで最も古い税に関する話。アブー・ユスフの「al-Jarây」より。）

ユスフ・アル・カルダウィによれば、いかなる宗派、いかなる宗教、いかなる時代に属するムスリムも、少数派の人々の財産の不可侵性について認めています。こうした保護の考え方はイスラームのハラム（禁事項、タブー）全般にも適用されます。例えば、ムスリムの間ではワインと豚肉は尊重すべき財産とされており、それを廃棄しても罪にならないばかりか、むしろ善行ともされています。しかし、それが少数派の人々の持ち物である場合はそれに手を付けることはできません。イスラームのスニ派ハナフィ学派では、ムスリムがこれらに手出しをした場合は罰金を科しています。

イスラームの考え方では、最低必需品に不足する人には、行政がそれを供給することとしています。イスラーム法学フィクフでは、この考えを非ムスリムである少数派まで拡大適用しています。それは例えば、預言者ムハンマドの同志の一人であるハリド・イブン・アル・ワリドがイランのキリスト教徒と結んだ契約にみることができます。「侵略行為により生活維持が不可能になったキリスト教徒、病人、また宗教を同じくする人々からの施しで生活をする困窮者は、ジズヤ（陣頭税）の支払いを免除されること、また、本人とその扶養者はムスリムの人々の財源によりその生活が維持されること」。この契約が交わされたのはメディナの最初のカリフの一人であるアブー・バクルの時代で、ムスリムの人々に認められた証人が契約に立会いました。アブー・バクルがこの取り決めに反対しなかったことから、その内容は合意を得られた先例となり、後世のムスリムにも義務付けられるようになりました。

二代目カリフだったオマルは、ある時ユダヤ人の老人が施しを乞うのを見かけました。なぜ貧しいのかとたずねると、老人は年老いて生活費を稼ぐことができなくなってしまったと答えました。するとオマルは、ムスリムの財政管理が

行われている場所まで老人を送り、彼の生活維持のため一定額の支給を行うよう担当官に命じ、また、老人と同じ境遇にある人々にも同じ処置をとるように命じました。「私たちはこの老人を正當に扱っていなかった。若いときには税を払わせ、年老いてからは税で保護することを怠っていた。」（アブー・ユスフの「*al-Jarây*」より）

ムスリムの心には常に、預言者ムハンマドの言葉である「ズィンミーに害を与える者や、その能力以上の要求をする者は私の敵である。彼らは奴隷ではなく自由民であり、住む場所を変えさせる権利は誰にもない。」（バラズリーによる『諸国征服記』（*Futuh al-buldan*））があります。ズィンミーに対する不正が長く続いた例はなく、次のような話がイスラームの記録にあります。ウマイヤ朝のカリフであるワリッド・イブン・アブド・アルマリクは、イスラームのモスクを拡張するため、キリスト教徒から教会を没収しました。次のカリフ、オマル・イブン・アブドゥル・アジズに世代が変わると、キリスト教徒たちが前任者の没収行為について抗議をしにやってきました。抗議を聞いた新しいカリフは、たとえモスクを解体することになるとしても教会を彼らに返還するように命じました。（『諸国征服記』 *Futuh al-buldan*）

アル・ワリド・ヤジードは、ビザンチン帝国の台頭を前に、ズィンミーにキプロス島から出て行くよう命じました。その目的はズィンミーたちの保護でしたが、彼らは土地を離れたくないと抗議の声をあげ、この抗議はあちこちで知られるようになりました。クルアーン学者と一般市民はすぐさま彼らに味方し、アル・ワリドは命令を撤回せざるを得ませんでした。この話は、カリフの名にふさわしい英断を示す美談として、彼の伝記に収められています。（『諸国征服記』 *Futuh al-buldan*）

13. イスラーム圏内で非イスラームの宗教を信仰する権利は守られていますか

イスラーム教徒と同じく、少数派の宗徒（ズィンミー）もその宗教を放棄する必要はなく、誰も彼らの信仰を変えさせることはできません。その基礎となるのがクルアーンの前出の部分です：「宗教には無理強いということが禁もつ」（クルアーン第 2 章アル・バカラ（雌牛） 256 節）。また、イブン・カジーラによるタフシール（クルアーンの注釈や解釈の書）には、「イスラームに入ることを義務付けてはならない。それはイスラームの理論や行動をみても明らかであり、誰にも強要すべきではない。」とあります。

イスラームが始まる以前からその初期にかけて、メディナにはある独特な習慣がありました。それは、不妊症の女性に子どもが生まれた場合、その子をユダヤ教徒にすると誓うというものでした。そのため、ユダヤ教の子どもたちの中には、イスラームが創始されてから親たちがムスリムになり、ムスリムの家系となる場合が出てきました。そして親が自分の子もムスリムにしようとしたとき、預言者は「宗教には無理強い禁もつ」と同じことを言いました。その頃、

メディナの町ではムスリムとユダヤ教徒との間で深刻な争いが起こっており、しかもムスリムの人々の息子や娘がすでにユダヤ人社会に入っていたり、親たちが子どもを敵への従属から救い出そうとしたりしていました。しかしそれにも関わらず、預言者は同じことを繰り返したのです。また、クルアーンでは他宗教への所属をめぐる暴力は禁じられていました。

その後、ムスリムの人々がエルサレムを陥落させた時には、彼らは次のように決めました：「オマル・イブン・アル・ハタブはエルサレム住民に対し、その生命、財産、教会、十字架、その他信仰に関わるもの全てに対する保証を与える。ムスリムが教会施設に住んだり、破壊したり、聖具類を持ち去ることはできず、また住民に改宗を義務付けたりもしない。」（タリフ・アル＝タバリより）。エルサレムが降伏すると、オマルはごく少数の兵士を従えて町に入りました。そしてオマルはエルサレムの長老に、町の中で神聖とみなされる場所を全て案内してくれるよう頼みました。長老が（エルサレムにあるキリストの）聖墓に祈りを捧げることをすすめたところ、オマルは外で祈りを捧げてよいのか尋ねました。自分の行いが後世の手本となり、教会をモスクに変えてしまうことがないように、と。

また、ハリド・イブン・アル・ワリドはキリスト教徒に対し、「昼夜を問わず好きなときに教会の鐘を鳴らしてよいが、ムスリムが祈りを捧げている時間は避けてもらいたい。同様に、ムスリムの祭日に十字架をかけるのも避けるように。」（アブー・ユスフの「*al-Jaráy*」）と決めました。

預言者ムハンマドは、イエメンのナジラン地方のアラブ系の一宗教から派生したキリスト教の代表団に対し、メディナのモスクに寝泊りする許可を与え、町に滞在する間はそこを住居として使うようにいいました。滞在期間は 20 日以上あったため、代表団の人々はモスク内部で礼拝を行ったと推察されます。これはイブン・カシールのクルアーン注釈であるタフシールの 348 ページ、クルアーン第 3 章「イムラーン一家」の 61 節に関する説明に記されています。

ナジランのアラブ系キリスト教の信徒、司祭、修道士達は、ヘラクリオの命に従い使命を果たすため、アッラーの預言者の前にやってきました。その時ちょうどムハンマドが午後の礼拝を終え、モスクから出てきたところでした。そして彼らがモスクに通されたとき、彼らの礼拝時間にあたっていました。すると預言者は、そこにいたムスリムたちに「この人達が礼拝をできるよう場所をあけておやりなさい」といいました。代表団の人々は立ち上がり、モスクの中で東に向かって祈りを捧げ始めました。

こうした説話はムスリムの人々が淵源とするものに収められており、人々はその間に規範的価値を見出しています。説話に登場する賢人たちは道徳的手本とされ、彼らが下した判断や決定はよき先例として人々の間で共有されています。

イスラームで唯一ズィンミーに課されていることは、ムスリムの感性を尊重することです。これを理由に、イスラーム法学者の間には公の場で非イスラーム宗

教の大きな祭典を行うべきではないという意見や、それまで教会やシナゴークがなかった場所には新しく建設すべきではないといった意見もあります。こうした行き過ぎた意見もあるものの、実際には極めて寛大な措置がとられています。例えば、ムスリムが多数派を占める地域でも、キリスト教の教会やユダヤ教のシナゴークが建設されており、さらにムスリムが建設したエジプトの町フスタットなど、それまで教会がなかった地域にも建てられました。歴史家のマクリジも、ウマイヤ朝やアッバス朝時代に新築あるいは改築された教会の例をいくつもあげており、さらに、豊かなイスラーム文化の開花はほかの宗教共同体にも刺激を与え、多くの教会やシナゴークが建設されるようになったとまで考えています。

さらにイスラーム法では、イスラーム地域に住む少数派である非ムスリムの人々に対し、彼らの裁判所をもつことと、自分たちで制定した法律を適用することが認められています。

14. イスラームの寛容さはクルアーンに根ざしているのでしょうか

イスラームの宗教的多元性はクルアーンの様々な章で述べられています。ここまででまだみていない例を以下に挙げてみましょう。：

- 言ってやるがよい、「真理は主の下し給うところ。信じたい者は信じ、信じたくない者は信じないがよかろう。」と。(クルアーン 第 18 章 29 節)
- いろいろな宗団が現に守っている祭儀はみなそれぞれに我らが設てやったもの。されば汝は、このことで、何もよその人々からとやかよく言われることはない。汝はいつも主をお喚びすればよい。(クルアーン 第 22 章 67 節)
- お前らにはお前らの宗教、わしにはわしの宗教。(クルアーン 第 109 章 6 節)
- 我らは汝らのそれぞれに(ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒それぞれ別々に)行くべき路と踏むべき大地を定めておいたのだから。勿論、アッラーがその気になり給えば、汝ら(ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三者)をただ一つの統一体にすることもおできになったはず。だが、汝らに(別々の啓示を)授けてそれで試みて見ようとの御心なのじゃ。されば汝ら、互いに争って善行に励まねばならぬぞ。結局はみなアッラーのお傍に還り行く身。その時(アッラーは)汝らが今こうして言い争いをしている問題について一々教えてくださるだろう。(クルアーン 第 5 章 48 節)

15. 「真の宗教はイスラームのみである」とクルアーンにありませんか

イスラームの寛容性についての論議は、クルアーンの第 3 章「イムラーン一家」の中の 1 節、*“Inna ad-din ‘aind Al-lâh al-Islam”* の解釈方法に端を發します。この節にある「イスラーム」を、歴史を通じて發展してきたイスラームの宗教及び文化と捉え、文全体の意味を「アッラーの御目には、唯一かつ真の宗教はイスラームである」と解釈するなら、極めて危険な宗教教理と同様に、この節は自信過剰で排他的だと思われかねないでしょう。

インパクトのあるこの解釈に対し、クルアーン学識者全体は同じ第 3 章 19 節についてまったく異なる解釈を与えているということ、非イスラームの皆さんにもお伝えしたいと思います。それによれば、「イスラーム」という言葉は特定の文化を指すのではなく、「神聖なる意思への服従」または「神聖なるものを受け入れること」であり、「イムラーン一家」の 19 節の意義は、「アッラーの御前では、唯一（かつ真）の宗教は、あの方への（人間の）服従である」とされています。

解釈における同様の誤りはクルアーンの第 3 章「イムラーン一家」の 85 節にもおこることがあり、無意識にしろ意識的にしろ、ここで使用されるイスラームという言葉が以下のような正しい訳で伝えられていないことがあります。

- 「“神への絶対帰依” 以外のものを宗教にしたいと思うような者は、ぜんぜん受け入れてはいただけまいぞ」（クルアーン 第 3 章 85 節）

16. ムスリムにとって、他宗教の預言者は本物の預言者でしょうか。

そう認識することがまさにイスラームであり、逆にそうでなければイスラームではありません。クルアーンによれば、アッラーに対して心を開く者は、「この預言者は認めるが、あちらは認めない」などと預言者の分け隔てはしないと述べています。どの預言者も「ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーのほかには神はなし）」と証言するのですから、ムスリムは彼らを区別することはありません。

17. ムスリムはキリストについてどう考えていますか

ムスリムはイエス・キリストを敬い崇めており、その復活を望んでいます。イエス・キリストは、人類にとって最も重要なアッラーの預言者の一人とみなされています。そしてムスリムは、単に「イエス」と呼び捨てることはなく、その名を口にした後には「彼に平安あれ」と必ず付け加えます。心がけのあるキリスト教徒であれば、ムハンマドの名を口にした後に同じことをしてみたいかがでしょうか。

イスラームの解釈では、イーサ（アラブでは伝統的にイエスはこう呼ばれます）はアッラーの美名のひとつであるアッ・ラフマーン（慈悲深き存在）の具現とされています。預言者イーサには忘我または神との合一感もしくは精神錯乱がみられ、ここからキリスト教徒たちがイーサに神性を与えるという混乱が生じました。クルアーンはイエスをルーフ・ミン・アッラー（アッラーの精霊）としています。イエスはアッラーに常に“屈し”ており、イエスの言葉はアッラーのものであったため、その言葉から宗教が制定されるべきではありません。

ムハンマドもイエスも、彼ら以前の預言者に伝えられてきた唯一神を信じるという基本教理を変えるためではなく、それを認識しなおし後世に伝えるために現れました。クルアーンでは、イエスは「わたしの前に（下された）律法を確証し（ユダヤ教の律法も福音と同じく唯一なる天地創造の神アッラーの啓示によるものであることを確証し）、かつまたこれまでお前たちに（宗教上）禁じられていたことの一部を解禁してもやろう。」（クルアーン 第3章 50節）といったとされます。

18. クルアーンと福音書の共通点と相違点は何ですか

どちらもアッラーの啓示ですが、それぞれ異なるタイプの人々に下されたため、その表現方法が異なります。福音書は「良い知らせ」であり、クルアーンはいわば警告です。イエス・キリストは寓話を通して人々に語りかけ、理解したいと思う人だけが理解できるようにしました。キリストは、偽善者を前にしたときを除けば優しい態度でものごとを表現していました。反対に、クルアーンでは衝撃を与える（*daraba*）ような事例が語られます。福音書ではキリストの優しさが印象に残り、一方、クルアーンは読む人を粉々にし、神を忘れ安楽に流されている状態（*gafila*）から抜け出すよう導きます。

19. クルアーンではユダヤ教徒やキリスト教徒は悪くいわれているというのは本当ですか

クルアーンでは多くの象徴が使われており、典礼偏重の宗教性（ノイローゼ的）は“ユダヤ教徒”、精神的な宗教性（身体性を嫌う）は“キリスト教徒”で象徴されています。反ユダヤ的、あるいは反キリスト的ともみられるそうした引喩表現も、ユダヤ教徒やキリスト教徒との争いの原因にはなりません。そのため、それが単に象徴ではないと考える人もいましたが、実際のところ象徴は象徴に過ぎないということが確かめられました。また、ヨーロッパからユダヤ教徒たちが追放されたとき、彼らはマグレブを始めとしたダラサラームの地（イスラームの地）で受け入れられていました。一方、キリスト教徒との関係に目を向ければ、ムスリムは攻撃者というよりも犠牲者の立場にありました。イスラームが人々に必要とされたのは、イスラーム以前の宗教が一字一

句に固執し、いわんとされていることが歪められた結果、精神性が失われてしまったからです。とはいえムスリムの人々は、ユダヤ教徒もキリスト教徒も敵視しておらず、イスラームには反ユダヤ論も反キリスト論もありません。天啓はひとつのメッセージであり、そのメッセージには耳にした人が理解し価値を認められるようなイメージや想像力が喚起されなければなりません。

20. ムスリム男性は、他宗教の女性と結婚できますか

預言者ムハンマドには、ユダヤ人の妻もキリスト教徒の妻もありました。ここからわかるように、イスラームでは非ムスリム女性との結婚も認められています。異教徒との結婚においては、ムスリムの夫は、非ムスリムである妻の宗教戒律を尊重して接することが義務付けられています。そのため、例えイスラームの戒律と異なるとしても、妻が信仰する宗教の寺院で祭礼に参加したり、その宗教で認められた食物や飲み物をとったりすることを禁じることはできません。

21. なぜムスリム女性は非ムスリム男性と結婚できず、ムスリム男性は非ムスリム女性と結婚できるのでしょうか

イスラームへの改宗に関しては、本人の意識のほかには要件や規定事項はありません。男性にとり、ムスリムの女性と結婚することはイスラームを知るためのよい機会となるでしょう。

ムスリム男性が非ムスリム女性と結婚する場合には、女性が信仰する宗教で認められている権利が保証されるよう、イスラームでは定められています。反対にムスリム女性と非ムスリム男性が結婚した場合には、夫となる男性の宗教でムスリム女性の宗教的権利を尊重するよう義務付けられているかは確かではありません。

いずれにしても、このテーマについてはイスラーム法（フィクフ）に基づいて討議が行なわれており、イスラーム法の適用方法は徐々に変わってきています。例えば、キリスト教徒あるいはユダヤ教徒の夫を持つ女性が、改宗してムスリムとなった場合がそれにあたります。この場合、ムスリム女性が異教徒と結婚していることにはなりますが、それに対して離婚は勧められず、そうした結婚形態を認めるようになっていきます。

22. イスラームへの勧誘はありますか

イスラームにはキリスト教にみられるような勧誘行為はありません。それは、イスラームでは教えを説く必要がないからです。他にする必要があるとされているのは、周囲の人々が何を必要としているかに対して敏感になるということです。誰かに何かを求められたときには、それがお金であれ言葉であれ、寛大に接することが望ましいでしょう。これは求められたときだけで構いません。

また、イスラームは排他的な選民思想ではありません。「ダワ」という言葉があり、これは全ての人に向けてイスラームを開放することです。預言者ムハンマドは、人々を改宗させるためにクルアーンを使用したことは一度もありませんでした。クルアーンは人を説き伏せるためではなく、すでに信仰心をもつ人々に向けられているのです。では何が人々を信仰に導いたのでしょう、それはムハンマドとの関わりです。

23. ムスリムはリッダ（背教）を理由に他のムスリムを殺すことができますか

このテーマは、預言者のハディース（慣行集）の誤った解釈の中でも、とりわけ残念なもののひとつです。ムハンマドのハディースには、一見して背教者が血を流すのを適法としているかのような部分があります。

「ムスリムが血を流すのは違法である、ただし、彼の宗教をすて共同体から離れる者は別とする。」（ナワウィ、ハディース 14）

とはいえ、このハディースにおける意味を正しく理解しなければなりません。預言者ムハンマドの周囲で行なわれた背教行為とは、流行りの思想や学者気取りの態度をとることではなく、文字通り *fâraqa-yufariqu*、つまり「対立すること、反対側につくこと」でした。これはスペイン語で誤訳され広められた、単に「共同体から離れる」ことではなく、この世界からムスリムとイスラームを消滅させようとする能動的で好戦的な態度を指しています。通常、アラブ語では *irtadda-yartaddu*（対抗する、妨げる他）という動詞が使われますが、ここで使われている語にはもっと強い意味があり、非ムスリムの間で少数派として何とか生きている側を見棄て、ムスリムに攻撃を仕掛ける側につくことを指します。こうした行動と私たちが一般的に考える背教との間には、明らかに大きな違いがあります。

イスラームが創始された時代、アラビア半島には暴力がまだ横行しており、ごく些細なことから諍いが起こっていました。預言者ムハンマドは、ムスリムの人々は同じひとつの家族の兄弟のようになるべきだという、当時としては革新的な考えを掲げて、ムスリムによってムスリムの血が流されることを禁じました。しかしその後、いったんムスリムになった人々の一部が、反イスラーム側にまわり戦いを仕掛けてくる事態が発生しました。これが預言者のいう「背教（リッダ）」であり、現在私たちが考えるような単なる宗教放棄や改宗を指していたわけではありません。ムハンマドの時代には、背教者とは単に「シャハー

ダ（信仰告白、公の場でイスラームを信じると認めること）」を行わない人物ではありませんでした。誰もがイスラームを積極的に肯定するか、積極的に否定するか、もしくはイスラーム側から敵側にまわりつつあるかのどれかであり、その場合の背教者の多くは、イスラームに対し死を賭して戦うことを誓いました。そのため、一度ムスリムとなった者に危害を加えてはならないという預言者の命令に従うなら、敬虔なムスリムは、敵にまわった元ムスリムには戦場で殺されざるを得ないという事態に陥りました。こうした状況を前に、預言者ムハンマドは、ムスリムが生命の危機にあるときにはイスラームの背教者の血が流されることを認めたのでした。しかし、それ以外の状況における流血は認められていません。

24. 「不信心者」を改宗させる目的の「ジハード（戦い）」は適法なのですか

クルアーンに、不信心者を改宗させるためにジハードを行うことを述べた節は一つもありません。ムスリムの人々の間で知られているのは、むしろ前出の節「*Lâ ikrâha fi d-dîn*」（クルアーン 第2章 256節）や、下記の節などです。

- だが神様さえその気になり給えば、地上の全ての人間が、みな一緒に信仰に入ったことでもあろう。お前（ムハンマド）が、嫌がる人々を無理やりに信者にしようとしてできることではない。（クルアーン 第10章 99節）

イスラームでは、誰かを改宗させるために力に訴えることは認められておらず、また、長い間、自己防衛のために力に訴えることも許されていませんでした。初期のムスリムの人々が、圧制に抵抗したり迫害者に復讐したりすることを望んだとき、預言者ムハンマドは「戦えという命令はまだ私に下されていない」と彼らを押しとどめました。さらに後になり、ムスリムの人々が力行使する許可がアッラーから下されました。この許可に触れたクルアーンの一文は、イスラームが信仰の自由を認めない狂信的宗教だと考える人々にとっては、あまり面白くないものかもしれません。

- 不当な目に遭わされた者が、相手に敢然と挑みかかることはお許しが出ておる。そういう人たちはアッラーが助けて立派に勝たせて下さろう。すなわち、なんの罪とがもないのに、ただ「我らの主はアッラーだ」と言うだけの理由で住居から逐い出されたような人たちのこと。アッラーのおはからいで、人間がお互いに撃退し合うようになっていなかったなら、修道院でも教会でも祈祷所（ユダヤ人のシナゴグ）でも礼拝堂（回教徒のマスジド）でも、およそアッラーの御名が盛んに唱えられるようなところはみな完全に壊されていたことだろう。（クルアーン 第22章 39-40節）

ムスリムはジハードを歓迎しているわけではありません。クルアーンにも「戦うことは汝らに課された義務じゃ。さぞ厭でもあろうけれど。」と述べられています。ムスリムは平和な人々なのです。

- もし彼らの方で和平のほうに傾くようなら、お前もその方向に傾くがよい。そしてすべてアッラーにお任せ申せ。アッラーは耳敏く、全てを知り給う。(クルアーン 第8章61節)

「戦争」を意味するアラブ語 (*qitāl*) はムスリム同胞団を設立したハサン・アル・バンナを思い起こさせますが、この言葉はイスラーム法学においては決して使用されません。なぜなら、イスラームでは狭い意味でのジハード以外の戦争は禁じられているからであり、狭義のジハードとは圧制に対する自己防衛の戦いを指します。

25. 「楽園は剣の影にある」のでしょうか

イスラームを敵対視する人は、クルアーンからジハードに関する部分を引用するときには限られた部分だけを取り出し、前後の文脈から切り離してしまうのが常です。しかし、アッラーは正当防衛だということを明らかにしない限り、暴力に訴えることを許しませんでした。「楽園は剣の影にある」や「どこであれ彼らを見つけたら殺せ」といった文を引用する場合は、文が含まれた節全体も読むべきでしょう。

“人々よ、敵と戦うことを望むべからず。アッラーに救いを求め給え。だが敵と戦うならば、忍耐強く戦い、楽園は剣の影にあることを知るべし。” (リヤド・サリヒーン、1331)

次の文章を注意して見てみましょう。

- そのような者と出くわしたらどこでも戦え。そして彼らが汝らを追い出した場所から (今度は) こちらで向こうを追い出してしまえ。もともと (彼らの引き起こした信仰上の) 騒擾 (または迫害) は殺人よりももっと悪質であったのだ。だが、(マッカの) 聖殿の近くでは、向こうからそこで戦いをしかけてこないかぎり決してこちらから戦いかけてはならぬ。向こうからお前たちに仕掛けてきたときは、構わんから殺してしまえ。信仰なき者共にはそれが相応の報いというもの。しかし向こうが止めたら (汝らも手を引け)。まことにアッラーは寛大で情け深くおわします。
- 汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において (「聖戦」すなわち宗教のための道において) 堂々とこれを迎え撃つがよい。だかこちらから不義を仕掛けてはならぬぞ。アッラーは不義なす者どもをお好きにならぬ。
- 騒擾がすっかりなくなる時まで、宗教が全くアッラーの (宗教) ただ一条になる時まで、彼らを相手に戦い抜け。しかしもし向こうが止めたな

ら、(汝らも) 害意を棄てねばならぬぞ、悪心抜きがたき者どもだけは別として。神聖月は神聖月で返せ(戦闘を禁止する齋忌の月に向こうが攻めて来たらこちらも神聖月の禁を破って返報してよい)。(クルアーン第2章 190-194 節)

ジハードの動機は必ず、先に相手からの攻撃を受けたことでなければなりません。以下のクルアーンの節にもそれは述べられています。

- 多神教徒は徹底的に攻撃するがよい。向こうでも汝を徹底的に攻めて来るからは。(クルアーン 第9章 36 節)
- もし彼らが身を引いて、汝らに戦いをしかけず、和平を申し出て来るようなら、それはアッラーが、もはや汝らに彼らを攻める道をお与えにならないということ。彼らがあくまで退かず手を引いて和平を申し出て来ないようならば、つかまえて、どこでも手当たり次第に殺してしまうがよい。(クルアーン 第4章 90-91 節)
- だが、彼らが、汝らと誓約を交わしておきながら、それを破って、汝らの宗教に突っかかってくるようなら、その時こそ敢然として無信仰者の首領どもを攻めるがよい。もともと彼らには固い誓いというものはありません。そのうちに向こうから止めてしまうかも知れぬ。これ、誓約を破った上、この使徒(ムハンマド)を追放しようと企てたあの者どもと戦わないのか。向こうから最初しかけてきたのではないか。(クルアーン 第9章 12-13 節)

26. 「正当な戦い」の条件とは何ですか

この質問に関しても、他の問いと同じように、クルアーンや預言者ムハンマドのスナ(慣行)にはっきりとした教えを見つけることができます。クルアーンの前出の部分にあるように、「正当な戦い」であるための唯一の条件は“ムスリムが始めた戦いではなく、他からの攻撃に対する戦い”であることです。

伝統的なイスラーム法であるフィクフに照らし、戦いにおける制限について、禁止されている事柄を確認してみましょう。

- 戦士でない者を殺してはならない (Mabsit de Sarajisy, X, 64)
- 女子供を殺してはならない (Muwatta, 第21巻, ハディース 8,9,11)
- 主人に従う召使や奴隷で、かつ戦いに加わっていない者を殺してはならない (Mabsut de Sarajisy, X, 64)
- 不自由があり戦いに加われない者、つまり老人、盲目の者、身体障害者、精神障害者を殺してはならない (Mabsut de Sarajisy, Sharhj al-Siyar al-Kabir, IV, 78)
- 商人、代理業者やそれに近い職業の者で、戦いに加わっていない者を殺してはならない (Jaray de Yahya, p. 34, Jaray de Abu Yusuf, p. 122)

- 戦いに加担していない農民を殺してはならない（タバリでのアブー・バクルの慣行, 2026 及び 2031; ‘Omar en Ibn Rush Bidayah al-Masjtihad I, 131)
- 敵に拷問を加えたり身体の一部を切り取ったりしてはならない（アヴェロエスのアル・ビダヤ)
- 刀や弓矢などの武器を手にした男性同士の争いでなければ、誰かを殺してはならない。また、火の使用は禁じる。無差別殺人を引き起こすカタバルト（投石器）などの戦闘道具の使用も禁止。ただし、砦に老人や女子供やいないとわかっているときに限っては使用を許可する。（預言者のハディースに基づいてオマルが定めた習慣）
- しかしまた、果実のなる木を切り倒したり、羊や牧畜をその日食べるため以外の目的で殺すこと、蜂を焼き殺したり解き放ったりすることもしてはならない（アブー・バクルの習慣、リヤド・サリヒーンの手紙 21:10 より）
- 建造物に誰もいなくても破壊してはならない（アブー・バクルの慣行）
- 修道士、僧、隠者など、階級に関わりなく聖職者を殺してはならない（ムワッタのハディース第 21 巻の 10; 預言者の言葉とアブー・バクルの慣行）

聖職者を殺すことについては、ムハンマドが下した命令を以下に記すこととしましょう。

“洋の東西、遠近を問わず、若者も老人も、互いを知る者も知らない者も、イスラーム共同体そしてキリスト教社会に住むムスリムの人々全てに対し、以下を命令として記す。スルタンであれ一介のムスリムであれ、ここにあることを遵守しないまたは私の命に従わない場合は、アッラーの思召しに逆らう者であり、必ず呪われるであろう。私は、僧や隠者が山や洞窟に暮らしているときも、平野、砂漠、町、丘あるいは教会にいるときも、私が軍と臣民を従えているときも、彼らと共にある。そして、いかなる敵からも彼らを守るだろう。人々よ、彼らに害を加えてはならない。教会から聖職者を、僧院から堂守を追い出してはならない。教会から物品を持ち出し、モスク建設やムスリムの家屋の建設に使用してはならない。キリスト教徒の女性がムスリム男性と関係をもったならば、男性は女性を大切にしなければならず、彼女が自分の教会で祈るのを認めなければならない。彼女をその宗教から引き離してはならない。もしこれに背く者があれば、その者はアッラーと預言者の敵となるだろう。ムスリムは、この世の終わりまでこの命令を尊重するべし。”

預言者ムハンマドの戦場での行動には、戦いをできるだけ回避するための智恵があふれていました。それは相手を威圧して攻撃を避けることでした。なぜなら、戦いを避ける最良の方法は相手から一目置かれることだったからです。ムハンマドは長時間前から戦地入りをしました。明け方に起きて戦地に赴き、信者たちを戦闘配置につかせ（クルアーン第 3 章 121 節）、そのまま数日の間、攻撃の命令を下さず待ち続けたこともありました。そして結局、敵軍が撤退し戦闘が終わったこともありました。しかし、通常は丸 1 日待った日暮れ近く、

預言者が「サキナ」と呼んでいた微風が吹くときに攻撃命令が下されていました。敵軍が停戦を申し入れたときには、預言者はそれを受け入れていました。決して誓約を破ることはなく、また、敵がそれを裏切りそうなどときには、誓約は信用できないから破棄をすると宣告してから、戦いを起こしていました（クルアーン第 8 章 58 節）。（クルアーンでは偽の誓約をすることは大罪とされており、「お前たち、誓約をお互いの間の騙しに使ったりしてはならぬぞ」（クルアーン第 16 章 94 節）とあります。）これらの行動からは、文明国とされる国々も学ぶことが多いのではないのでしょうか。

27. ムスリムは支配権力に逆らうことはできますか

後にカリフとなった預言者の同志にこんな話があります。ある日、オマル・イブン・アル・ハッタブはムスリムたちに向かって言いました。「私が何か正しくないことを命じたら、お前たちはどうするかね。」尊敬するカリフを前に、誰もその問いに答えられないでいると、カリフは同じ問いをくり返しました。やがて一人が、「ムスリムの王子よ、私たちは命令を撤回するようお願い申し上げます。撤回されれば、私たちはあなたに従っていきますが、ご命令を強要されるとすれば、あなたのお顔の目のあるその部分をくり抜いてしまうことでしょうか。」するとカリフはいいました。「アッラーに感謝を捧げよう。ムスリムには、間違いを犯したときにそれを直してくれる人間がいるのだから。」

オマルを始めとしたムアウィヤ、スライマーン、アブド・アルマリクなど歴代のカリフには、一般の人々から叱責を受ける話が数多くあります。それらはイマームだったガッザーリーの作品の中でも最も重要とされる *lhyâ 'Ulûm ad-Dîn* に収められています。いくつか例をみてみましょう：

- “私についてどう思うかね”、カリフのスライマーンが尋ねました。
- “その問いにお答えすることはどうぞお許しを”。アブー・ハシムが言いました。
- “おまえに忠告を求めているのだが。”（ムスリムには他人への忠告が義務付けられており、カリフは暗黙に相手の答えを強要しています。）
- “ムスリムの人々に事前に問うことも同意を得ることもなく、カリフの土地を力で取り上げた者がいます。こうした私利を得るための世俗事のために多くの人々の血が流されました。こうした人々はアッラーに何を問い、アッラーは何と答えたのでしょうか。” この最後の言葉を宮廷人の何人か聞き答めましたが、アブー・ハシムはいいました。「あなた方はまちがっている。アッラーは、真実を隠さず伝えるようにと賢者と取り決めたのだから。」

このようにカリフ（またはスルタン）とアッラーの友（スーフィーや修道僧）の対話の形をとって、数多くの文献で暴君に対する正直さが語られています。こうした文献はムスリムの人々の気質に多かれ少なかれ影響を与えているため、権力者は民衆を支配下に置いてもしも気を抜くことはできません。なぜなら、

賄賂のきかない者や、公正なイスラーム政体を望む権利を人々に説く者や、自分の身の危険をかえりみず専制君主に向かって同じことを告げたりする者がいるからです。

シラーズのサアディーが著した薔薇園（Gulistán）に次のような話があります。

- 行いの正しくない君主が、行いの正しい男に「憐憫を行動で表すにはどうするべきか」と尋ねたところ、男は「陛下が昼寝をなさることです。たとえ短い間でも、昼寝の間は臣民は陛下の圧制から解放されます」と答えました。

私は眠っている君主をみて思った。

永遠に眠りの床にあればいいだろう、と。

誰かが起きていてより眠っている方がいいとき、

生きているより死んでいる方がいいのだ。

- ある時、アッラーに何度か願いを聞き届けられたことのある修道僧がバグダッドにやって来ました。暴君として知られるハジャイ・ユスフは、修道僧の到着を聞きつけて彼を呼び出し、自分のために何か願い事をするよう命じました。修道僧はその命令に従い、「アッラーよ、この者の命を奪いたまえ」と祈りました。「何という願い事をするのだ」と暴君が叫ぶと、僧は答えました、「この願い事はあなたご自身のため、そしてムスリムの人々のためです。あなたが亡くなれば人々は圧制から解放され、ご自身もまた未来の愚行を犯さずにすむでしょう。」

28. イスラームで暴君の追放が法的に認められているなら、なぜ多くの人々が貧窮に苦しんでいるのでしょうか

その理由は、まさに質問の中にあります。暴君を道徳的に打ち負かすことができる人々も、貧窮の極限にあっては麻痺状態に陥ってしまいます。この世を治めるのは唯一神アッラーだけであることを思えば、心の中ではもちろん支配関係を否定できますが、完全な貧窮状態に置かれていてはその抵抗心を実行に移す力が残されていません。ムスリムは誰でもアッラーの名において暴君を処刑することが可能であり、それを誰よりもよく知っているのは、イスラーム国家の暴君自身なのです。

29. 非ムスリム国家に住むムスリムはどう行動するべきでしょうか

ムスリムは、イスラーム以外の土地でもごく普通に分別を持って行動すべきです。奇行はゲッターに送り込まれるきっかけともなり得ます。奇妙な行動は受け入れ社会に未知のものへの恐怖心を引き起こし、それまでムスリムを受け入れていた非ムスリムとの正常な関係を壊してしまいます。

イスラームでは、近隣の人々とよい関係を持つことが推奨されています。そこから発して、よい隣人関係は善行や信心の表れとみなされています。そして、クルアーンでは近隣の人々には一定の権利があるとされています。また、イスラーム国家では、ムスリム居住区を非ムスリム居住区から分離することはありません。むしろその反対であり、今も昔もイスラームではクルアーンに従い、ムスリムも非ムスリムも同じひとつの共同体に住み、全体の利益のために働いています。あるとき、預言者がユダヤ人の女性に食事に招待されたことがありました。食事の最中、その女が羊の足で預言者を毒殺しようとしていたことがわかりました。しかし、預言者はそれ以降も、そのことを理由にムスリム以外の人々の招待を断ることはありませんでした。それどころか、預言者はよき隣人関係の教えに従い、病気の人々を訪ねたり、困っている人を助けたりしていました。

ムスリムは、自分たちの受け入れ社会の祭事や行事には、たとえそれが宗教的なものであっても参加することが薦められています。預言者の妻の一人であるアーイシャも、近隣のゾロアスター教の人々から宗教行事の贈り物をされ、それを受け取っています。これと同じく、ムスリムは嬉しいことも悲しいことも含めて、生活のあらゆる場面を隣人たちと共有し、その社会で起こることと関

ムスリムにとっては、この世界全体がモスクなのです。そのため、イスラーム以外の寺院でも、ムスリムにその利用が許されればモスクになり得ます。第2代正統カリフのオマル・イブン・ハタブは、祭司からベレンにある教会への招待を受け、クリスマスに教会で祈ったことがありました。そのオマルの気品とカリスマ性に、司祭は大きな感銘を受けたといっています。

ムスリム社会では、旱魃時にはムスリム住民も非ムスリム住民も力を合わせ、それぞれの宗教祭式に従い雨乞いの祈願をするよう定められています。また、ムスリムが少数派の土地でも、祈願は自分たちだけではなく全体の利益のためにもなることから、それを行うよう薦められています。さらに、雨乞いといった生活の基本に関するようなことであれば、ムスリムは全体の利のためより一層の協力を行うでしょう。

イスラームでは、信者がそれとわかるような目印を付けることを義務付けていません。その理由は、異教の人々の間で議論の種となったり猜疑心を向けられたりしないようにという配慮です。そのためイスラームでは、各人が住む社会で定められた服装に関する一般的規定の他には、ムスリムが着用すべき衣服を規定していません。また、イスラームでは目立つ服装をすることや規定外の衣服を身に着けることは禁じられており、これは各人が住む社会の「*libas al-shohra* (注意を引く服)」と呼ばれています。イスラームにおける服装に関する唯一の決まりごとは、一度着用された衣類が他人の性欲や色欲を刺激しないようにということ、また、着用する人の尊厳を守ること、という点だけです。

30. ムハンマドのイスラーム共同体の文化的多様性とはどんなもの？

イスラームのモスク建築の多様性をみれば、真実に背を向ける者でない限りは、よそ者として権力を掌握した他の宗教とは異なり、イスラームが出会った土地や文化に適応してきたことがわかります。イランではペルシア文化から学び、パキスタンではヒンドゥ文化、アフリカでは部族文化、シリアではギリシア文化、ヨーロッパでは西欧文化から学んできました。そうした異文化から学ぶことで、ウンマ（イスラーム共同体）はより豊かになっていったのです。一方で、異文化との出会いにおけるムスリムの「宗教的な無邪気さ」から問題が発したこともあり、接触をした民族の間に劣等感を植え付けることで強大になっていったヨーロッパとの交流がそうでした。

31. イスラーム文化に固有のものはありますか、それともすべて異文化からの借用でしょうか

イスラームとは習得そのものであり、発展するにつれ学び続けています。イスラームは率直にその事実を受け入れ、異文化から多くを学んだことを認めています。とはいえ、イスラームにおいて文化的価値のあるものは、全て異文化からの借用だとするヨーロッパ的東洋学の考え方は、かなり歪んでいるというべきでしょう。例えば、（イスラームの本質に反するものでない限りは）先入観なしに学ぼうとするその態度にしても、イスラームに元来備わっている価値観であり、その事実は認知されるべきだといえます。

32. イスラームは科学の研究に対してどういった姿勢をとっていますか

この世界のものごとに関する研究活動は、神を知るための行いである限り、合法で賞賛に値するとされています。ムスリムは、人間を取り巻く万事がアッラーの意思を伝えていると考えます。そして万象には特徴というベールが覆いかぶさっているため、それが何を意味しているのかを私たちは知り得ません。例えば一本の木は何を意味し、一本の草にはどんな意味があるのでしょうか。ムスリムの精神性は、知覚を通じて現実を認識することで失われるものではなく、知覚と精神性は衝突するものではありません。私たちは同じひとつの心で創造界に、そしてアッラーに目を向けるのです。この世界はさまざまな現象の連なりであり、ひとつひとつの行為が絶え間ない生成活動です。大切なのはそれを理解し、そこに内包された意味、全ての行為に備わる内的一貫性を理解することです。知識そのものは聖でも俗でもありません。「知」それだけです。アッラーは「明白な」存在であることから、すべての「知」はアッラーの「知」に

あたります。万象を構成するのはアッラーであり、そのため「知」に対する制限はありません。

33. イスラームではダーウィンの進化論はどう考えられていますか

イスラーム社会では、反進化論と親進化論のどちらも多数派ではありません。進化論を受け入れることは、イスラームの実践（イバーダ）の妨げになるでしょうか。ダーウィンは間違っていたという証明することが、ムスリムであり続けるために必要でしょうか。そうした点が問題なのであり、科学論として正しいかどうかではありません。そうであれば、なぜ私たちは進化論などの科学論を承認あるいは拒絶する必要に迫られなければならないのでしょうか。例えば量子化学を取り上げ、それを承認したことなどがあつたでしょうか。ダーウィンの進化論には反キリスト教的な面がありましたが、それは、キリスト教では聖書は歴史そのものとされ、聖書の話信じないことは罪とされていたからです。しかしイスラームにはそういったことはありません。一部の人々がヨーロッパでの反キリスト教的な科学論を悪用し、イスラーム内部でダーウィン派や反ダーウィン派をつくり出して、対立（フィトナ）を引き起こそうとしているに過ぎません。ダーウィンの論理がどういったものであれ、私たちは立場論の罠に陥らないようにしなければなりません。ムスリムであれ非ムスリムであれ、ダーウィンについては生物学者が語り、超新星については天文学者が、クォークについては物理学者が語るべきでしょう。イスラームは、科学知識は歓迎しますが、知的分野への無資格介入やえせ学者の無駄口は歓迎されません。

34. イスラームでは芸術にどんな規制がありますか

人間は、超越経験を目的に美を創造することはできますが、作品を通して自己肯定をするためであってはなりません。そのため、イスラームには芸術に関する規制や制限はありません。ただひとつ求められているのは、それが「芸術」であること、つまりものごとの表層だけを捉えるのではなく、万象の背後にある存在を表現するということです。

35. イスラームでは彫像は禁止されているのですか

彫像や彫刻は禁止されていません。イスラームで禁じられているのは「イメージあるいは像」であり、彫像とは異なります。とはいえ、イスラームで彫像に不信感がもたれる理由には、イスラーム化した地域で、以前は聖画像崇拝が行われていたことがあります。預言者は、聖画像や偶像を崇めることで人々の生活の質が落ちてしまうのを目にして、イメージや像を拝し偶像崇拝をやめるべきだと考えました。彼のその考えは天啓を通してアッラーにも認められました。

預言者の一生は理論や哲学ではなく、実際的な証明です。ムスリムの人々は、彫像をつくり「イメージ」を生み出すことの危険性を意識し、そして神へ近づくための唯一の方法は人間の想像力だと考えています。具象化された「イメージ」は、人間の想像力を弱めてしまうのです。そのためイスラームではあまり具象的な芸術作品は好まれず、むしろ想像力に重きがおかれ、形状であれ概念であれ、ものごとを固定してしまわないようにする傾向があります。

36. イスラームでは魔法や占いはどう受け止められていますか

イスラームでは魔術師や占い師は信じられていません。超越の世界はデリケートであり、人々の繊細な心を利用しようとする詐欺師が現れやすいものです。その一部が、魔術師 (*kâhin*) や占い師 (*'arrâf*) となり、人々の信仰心を弄びます。人が権力や我欲のために「不可視界 (マラクート)」に入っていくと、ムスリムがジン (妖霊) と呼ぶ闇の力に晒されてしまいます。ムスリムにとり、そうした誘拐に打ち勝つための魔除けは、イスラームの教えを守ることです。預言者ムハンマドはあるとき、「あなた方が困窮にあるときも忘れてはならないことは、クルアーン、私の慣習、そして私に続く善き人々の慣習です。」といました。ムハンマドや弟子たちのスンナ (慣習)こそが良識であり、知識を求める心であり、悪い結果を引き起こす行いに身を投じないことなのです。スンナには、魔術師や占い師に対して批判的な場面が数多くあります。

- 預言者ムハンマドは魔術師について尋ねられて、「彼らの言うことを信用してはならない」と答えました。人々は「預言者さま、彼らはなぜ嘘をつくのでしょう」と尋ねました。ムハンマドは、「ジンの一匹が魔術師の耳に真実をひとつ滑り込ませ、彼らはその真実を何百もの嘘と混ぜ合わせてしまったのだ」と答えました。 (*Mishkât al-maṣâbih*、第 21 巻 第 2 章)
- イスラームを受け入れ、魔術師を信じることなかれ。 (*Mishkât al-maṣâbih*、第 4 巻 第 1 章)

精神世界に関することで信頼がおけるのは預言者だけです。預言者ムハンマドは学ぶべきことを伝え、アッラーへの道をまっすぐ歩むようにいいました。私たちはその道を、予言や前兆や占いなどに囚われることなく歩んでいくべきです。

37. なぜムスリムは生まれ変わりを信じないのでしょうか

アッラーは世界 (そして世界の万象を) を完全にそして完璧に創造しました。あらゆるものが本来とるべき姿をとっており、それ以上よくすることはできません。それは瞬間ごとに顕れています。その他のことは人間の幻想に過ぎず、自分の行き詰まりをなだめるための虚しい期待に過ぎません。何かをするチャンスは今ここにあり、先送りはできません。チャンスは二度と巡ってこないのです。クルアーンには、人生を有効に生きなかつた人は、「再び人生を生きることがあれば、前と同じところまでしか辿り着かないだろうとあります。

38. フィクフ（イスラーム法）はどう読み解くべきでしょう

フィクフ（イスラーム法）は料理のレシピ集ではありません。本から学んだフィクフは日常生活におけるフィクフとは全く異なり、日常では賢者やムフティにより変化がつけられていきます。書物の形をとるフィクフは、ばらばらにして色々な場所に持ち運ぶようにできておらず、また、誰にでも使いこなせるものではありません。イスラームの教えは、昔も今も口から耳へと伝えられる口承伝統です。専門知識を備えた指導者なくしては教えには血が通わず、非人間的ですらあります。イスラームの指導者は弟子たちに、知識に伴われるべき温かさも伝えます。イスラームにおけるフィクフは、固定された法学モデルで成り立つのではなく、各ケースに適合されなければなりません。ひとつの問題に関しては、クルアーンにある表記に加えてスンナ（預言者の慣行）、イジュマー（イスラーム共同体の合意）、キヤース（類推）が合わさりイスラーム法の柱をなしています。

39. クルアーンは自由解釈（イジュティハード）をしていいのでしょうか

イジュティハードというテーマについては、大変議論が行われています。なぜなら、イスラーム国家といわれる国々は自由解釈という可能性にフタをしてしまいたいと考えており、イスラーム共同体 18 億人の一人ひとりが自由解釈を行えば危険な混乱状態に陥りかねない、という理由付けをしています。しかし、イジュティハードの素晴らしい豊かさを排除することと、相対主義や対立（フィットナ、イスラーム内部の確執）に陥ることの間には、ちょうど中間点があります。それは自分自身のイジュティハードを、イスラームの兄弟たちと共有することです。それにより常軌を逸した行動はなくされ、各個人の実体験から得られたフレッシュな考え方が、智慧としてイスラーム共同体全体に広められていきます。つまり、イジュティハードなしに各個人が権力機関に服従するのではなく、かといって何世紀も前から伝えられていることに耳を傾けず、一人ひとりが気まぐれで神聖な書物を「自由に」解釈してよいということでもありません。

SEGUNDA PARTE 第2部

40. イスラームとは何ですか

イスラームは新興宗教ではなく、「神聖なるものを認知する人間の能力」そのものです。それは、アッラーが歴代の預言者を通して啓示してきた真実でもあります。

クルアーンには、「アッラーは全ての人々に指針となるべき慣習を与えた」という部分があります。ムスリムはシャハーダ（信仰告白）を通じて、あらゆる男女に与えられた超越的世界観をもって生きる権利と、その真実に基づいて社会をつくり上げる権利を主張しています。

その意味では、イスラームは単に宗教というよりは一つの生き方といえるでしょう。この世界には、神性に覆いを被せてしまう生き方と被せない生き方の二種類があります。前者は神性を認めず、人生の流れに従わずこの世の生をコントロールしようとする者で、「カフィル（不信心者）」または破壊者と呼ばれます。それに対して後者は「ムスリム」と呼ばれ、あらゆる存在を支配する何かがあることを信じ、人生を自分だけのものとは考えず、私たちがアッラーとよぶ森羅万象の根本的な存在に絶対帰依することが唯一の生き方だと考える人々です。アッラーに自己を委ねることを通じて、私たちは繊細な心を得てアッラーの平安に身を浸すことができます。

41. イスラームの五柱とは何ですか

イスラームでいう「五柱」とはムスリムの生活の礎となる行いのことで、神の唯一性を信じるというシャハーダ（信仰告白）、サラート（礼拝）、ザカート（貧しい者への手助け）、ラマダン（断食）そしてマッカへの巡礼を指します。

42. シャハーダとは何ですか

「ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマド・ラスールッラー（アッラー以外に真に崇拝すべきものはなく、ムハンマドはアッラーの使徒である）」と証言することがシャハーダです。それを口にするだけという簡単な方法ですが、これを自分の血肉として行うには一生かかります。

シャハーダは二つの部分からなります：

- 前半の「ラー・イラーハ・イッラッラー」は、存在するのは「神々」ではなく「唯一の神」のみであるという意味です。アッラーはアラブ民族だけに限られた神ではありません。また、預言者ムハンマドが知覚した

神は、彼以前の預言者たちに啓示を下した神と別の存在ではありません。ただし、ムハンマドは、様々な宗教が神の真実を歪めようとしたといっています。

- 後半の「ムハンマド・ラスールラー」とは「神の使徒」ですが、それはこれまでいわれているように排他的な意味ではありません。ここは「ムハンマドはアッラーの預言者（そのもの）である」というよりも、「ムハンマドは彼の預言者（のひとり）である」と訳すべきでしょう。ムハンマドの誠実さを理解するべきで、彼以前の預言者と対立させるべきではありません。

シャハーダの意味は、「言葉に尽くしがたく理解も及ばない、アッラーと呼ばれる神聖なる存在のほかに、真実、真正、実質的なものは何もない。ムハンマドはこの真実を証言するために現れた。」です。

43. シャハーダは信仰表明ですか

ムスリムはシャハーダを通じて、何を信仰するかではなく、いかにこの世を生きるかを宣言しています。この世に内的規律や内的論理が存在すると認めることを通じ、シャハーダに至ります。シャハーダを唱えることは信条を受け入れることでも、妥協でもなく、誠実に精神的道程を歩もうとする自分自身の意思を公の場で証言することです。ムスリムに必要なのは、「信仰」という名の、自分でよく理解していないにも関わらず救いを求めて受け入れようとする超自然的な力ではありません。そうではなく「イマーン」、つまりこの世界に存在することを私たちが直感的に感じている秩序について信じることであり、現実世界にそなわる意義に対して自分を解放することです。イスラームでは、ムスリムになる前にも後にも信仰教育は行われません。ムスリムの歩む道に宗教教義はありません。例えばキリスト教では、キリスト教徒になるために次の生があると信じなければなりません、イスラームでは今この場でイスラームの生を生きるよう説いています。

44. なぜ人はイスラームに改宗するのでしょうか

自分を信者だと考える人は、万物そして自分自身を存在たらしめているのはアッラーだと直感で理解したことから、信者なのです。アッラーは人間を超越した存在であり、人に頼まれることなく生を与え、望まれることなく死をもたらします。この世の各瞬間が自分の意思ではなく、自分を内側から統制する存在に委ねられていると理解したとき、その人はムスリムとなります。この世に生を受けたこと、生きることそして死ぬことも自分の力ではないと気づき、それを支配する存在が自分の内面に在ると見いだしたら、その人はムスリムです。その存在にどんな名を付けたとしても、生の一瞬一瞬が自分よりも大きな存在に委ねられており、全てはその存在次第だということに気付いたなら、意識す

るとしないに関わらず、自分が創造主ではなく創造物だと認めたことになり
ます。なぜならその中間はなく、誰もが前者あるいは後者だからです。

45. ムスリムになるにはどうすればいいのですか

イスラームでは、誰も「ムスリムになる」ことはないと考えられています。そ
の第一の理由は、神の存在をあえて否定しない限り、全ての生き物はムスリム
であるからです。非ムスリムになるには特に何かをしなければなりません
が、ムスリムであるためには何もする必要はありません。預言者ムハンマドが言っ
たように、人はムスリムとして生まれてくるのです。

次に、「ムスリムになりたい」と考える人はすでにムスリムであり、同時にそ
れまでもムスリムだったのです。一般に「改宗の儀式（信仰告白、シャハー
ダ）」と考えられるものは、信仰の宣言に過ぎず、イスラーム共同体を前にシャ
ハーダを行い、自分もまたムスリムと自認する人々の仲間だと知らしめるた
めの行いです。

46. シャハーダをすると何が変わりますか

シャハーダで行われることは、意思の宣言だけです。それは魔法じみた行為で
はありません。もし魔法や魔術性があるとすれば、その行為はシャハーダにあ
たらないでしょう。それは実際に驚くほど簡単な行為です。シャハーダをした
人自体、その前後で何か変わるわけでもありません。なぜなら、シャハーダを
行う人はそれまでの人生でもムスリムだったのであり、シャハーダ以降もムス
リムであり続けるからです。シャハーダに備わるのはイスラーム化であり、こ
の点が重要なのです。イスラームに入るには、言葉ではなく行動を通じてそれ
を行います。

47. サラートとは何ですか

サラートは、マッカの方向に向かって 1 日に 5 回礼拝を行う義務を指します。
信者にとって礼拝は、自己の深い内面で日々、神と向き合うための機会です。
イスラームには宗教的な階級や権力者そして聖職者もないため、礼拝を率いる
役目は一番年長の者や、クルアーンをよく理解している人や読誦のうまい人、
家の主人やその時に都合がつく人などが果たします。1 日 5 回の祈祷ではクル
アーンの節を、ムハンマドに下された天啓の言語であるアラブ語で読み上げら
れます。

毎回、サラートの前には、モスクの尖塔から祈祷の呼びかけが行われます。呼びかけの内容は以下のとおりです。

アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。
アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。
アッラーのほかに神はなしと私は証言する。
アッラーのほかに神はなしと私は証言する。
ムハンマドはアッラーの使徒であると私は証言する。
ムハンマドはアッラーの使徒であると私は証言する。
礼拝に来たれ。礼拝に来たれ。
成功のために来たれ。成功のために来たれ。
アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。
アッラーのほかに神はなし。

サラワート（サラートの複数形）は日の出前、日が一番高い時、午後の半ば、日没後、一番星の出るときに行います。モスクの中で人々が集まって行うことが理想的ですが、ムスリムは基本的に場所を問わず、野外、オフィス、工場や大学などどこでも祈祷を行うことができます。世界全体がモスクなのです。

イスラーム地域を訪ねたことのある人は、日常生活におけるサラートの重要性に大きな印象を受けたことでしょう。ムスリムの一日はサラワートによって区切られており、そのため人の一生とはサラートからサラートへの移り変わりなのです。ムスリムにとって、自分の存在を創造主に感謝するために定められた区切り目のない一日は、無価値な一日になるでしょう。

48. サラートの前に行うウドゥ（洗淨）にはどんな意味がありますか

ウドゥには様々な意味がありますが、とくに身体を浄めることを指しています。それにより基本的要素（水）に触れ、血液を活性化し、礼拝の前と後という区切りをつける働きがあります。イスラームの賢者たちは、身体がサラートに「在る」ためにウドゥを行なうとしています。ウドゥはいつてみれば橋であり、それなしには片方の川岸からもう片方へ渡ることのできないものです。

49. ザカートとは何ですか

イスラームでもっとも重要とされる根本的原理の一つに、万物がアッラーに従属するということがあり、そして人間の富や財産は一時的に預けられているに過ぎないという考え方があります。ザカートという語の起源は、アラブ語の「成長していくため、自分を何かから解放する」という動詞であり、そこから古スペイン語の「**azaque**」という語ができました。私たちの財産は、その一部を貧しい人々に分け与えることで適法なものになります。それは、樹木の剪定で少し枝

に鉄を入れることでその木全体のバランスが正され、より育ちがよくなるのと同じです。さらに正確に言えば、ザカートは「人が社会に与えるもの」ではなく、「各個人の資産に対して社会が有する権利」です。それは定められた事柄であり、たとえ誰もが公正ではないとしても（管理する人がいないため）、自発的あるいは自由裁量による行為ではありません。

ムスリムは毎年、各自が自分の所有資産を計算し、その 2.5%をザカートとします。

また、他人の苦しみに敏感かつ寛大な人なら、与えたい分だけサダカ（喜捨）の形で渡すことができ、これはなるべく人目につかないように行うことがよいとされています。サダカは「自発的な喜捨」と訳すことも可能ですが、それよりも意味範囲は広く、誰かを招待することやお祝いをするのもサダカにあたります。

預言者ムハンマドはいいました。

- 笑顔であなたの兄や弟に会いに行くことも、サダカなのだ。
- 「サダカはムスリム一人ひとりに必要だ」と預言者がいいました。「もし財産のない人がいたらどうしたらいいでしょう」と誰かが尋ねました。預言者は、「自分の手を使って働き、利益を得て、その一部をサダカとして寄付することだ」と答えました。他の人々が尋ねました、「働けない人はどうすればいいでしょう」。預言者は、「貧しい人々や身体の不自由な人々を助けることだ」と答えました。さらに人々が尋ねました、「それでもできない場合は？」、すると預言者は「周りの人々に善行をすすめることだ」と答えました。それでも人々が「それでもできないならばどうしましょう」と尋ねると、「悪いことをしないよう心がけることだ。そういった行いもサダカにあたる。」と預言者は答えました。

50. シャムとは何ですか

全てのムスリムは、毎年ラマダンの月には、日の出から日の入りまでの間、飲食や性交を行わないことになっています。病人や老人、旅行者、妊娠中、生理中や授乳中の女性は断食を免じられています。そうした人々は、各自がラマダンをできる状態になったときに、同じ日数分ラマダンを行うことがすすめられています。身体的理由から断食をできない人は、断食しない日数分にあたる食べ物を貧しい人々に施すこととされています。子供たちは思春期から断食を始める（同時に定時の礼拝もしはじめます）とされますが、実際にはそれ以前から始めるケースが多いようです。

断食は健康によいだけでなく、エゴを抑える自己鍛錬の方法とされています。断食を行い、短期間であれ生活基本物資から身を引くことで、飢えに苦しむ人々に心からの憐れみを感じ、私たちの存在が日々の奇跡のおかげでここに

ることを理解し、精神性を深めることに役立ちます。ひとかけらの食べ物や飲み物を大切にすること、私たちに与えられた平和の道にある性の素晴らしさ、生きることでもある人間の喜びなどが理解できるようになります。

「断食はアッラーの一部」といわれるように、断食をする人は、何にも似ない唯一の存在である神に出会うことができます。ジャンナ（樂園）においては、我欲やエゴや不幸はすべて取り除かれるでしょう。自分に残るのは断食だけとなり、自我から解放された状態になります。真の断食とは、タウヒード（神の唯一性）と呼ばれる状態、それ他には何もない状態に到達することです。だからこそイスラームでは、「断食をせよ。自分自身を絶て。神以外のものはすべて取り除くべし。」とっています。

51. ハッジとは何ですか

ハッジはマッカへ毎年行う巡礼のことで、それを身体的にも経済的にも行う能力があるムスリムだけに課された義務です。毎年、世界各地から約 2 百万人の巡礼者がマッカにやってきて、心を同じくする様々な人々が、神のもとへ環るという目的のために集います。マッカにはいつも訪問者があふれていますが、ハッジが始まるのは毎年イスラーム暦の 12 番目の月です（イスラーム暦は太陰暦で、ハッジとラマダンには夏にあたり冬にあたりします）。巡礼者はいずれも簡素な服を身にまとい、階級や文化は脱ぎ捨てて神の前では皆が平等であることを表しています。

ハッジの習慣の起源はイブラヒムの時代に遡ります。ハッジではカアバ神殿の周りを 7 回まわり、イスマーイールの母ハガルが水を探し求めたときに習い、サファとマルワの丘の間も 7 回往復することになっています。そのあと巡礼者はアラファト山に集まり、アッラーのご加護を求めて祈ります。時にそれは、審判の日のようにみえることもあります。

ハッジの最終日には、どのムスリム社会においても「イード・アルアドハー（マッカ巡礼の最終日に行う犠牲祭）」という祭りが行われます。この祭りと「イード・アル・フィツル（断食明けの祭り）」という祭りがイスラーム暦においてももっとも重要とされる祝祭です。

52. ハッジに象徴されるのは何ですか

ハッジとは人間の限界、力の限界、自分自身の限界といった、極限への旅です。それは身体的消滅、心理的消滅の体験です。カアバ神殿にあるのは、偉大なるアッラーの象徴です。アッラーの預言者たちによれば、イブラヒムはカアバ神殿を建設することで、人々の思いの心臓部分となる具体的な場所をつくり、

人々の心を具現化しようとした。カアバ神殿に赴くことは、自分自身の心に環っていくことなのです。

53. カアバとは何ですか

カアバは、四千年前にアッラーがイブラヒム（アブラハム）とイスマーイールに命じて建てさせた礼拝場所です。伝説によれば、この石の神殿が建てられた場所はアダムの聖地でした。アッラーはイブラヒムに、ここを訪れるようあらゆる人々に説くことを命じました。そのため、現在でも巡礼者がカアバ神殿に集うと、イブラヒムの呼びかけに答えて「神よ、仰せに従います」と唱えます。

54. ムスリムは黒い石を崇めているのでしょうか

ムスリムが崇拝するのは、黒い石ではなくアッラーです。ムスリムはマッカにある聖所であるカアバ神殿の方角に向かって礼拝を行いますが、黒い石はカアバ神殿の中心にあるわけでもなく、建物の一角にあるに過ぎません。預言者ムハンマドは黒い石にキスをしましたが、これは「単なる石であるにも関わらず」（とオマルがいうように）彼以前の預言者たちに敬意を表すためにした行いでした。イスラームでは全てに神性があるとしており、あらゆる事象が神聖視されています。一部の人々は木彫の彫刻やアッラーの像を崇めています。そうした人々には、アッラーの彫刻や木の彫り物が、ムスリムの生きるべき神性のある世界に属さないというだけでなく、神性を彫り物に閉じ込めて、自分の可能性を制限してしまうという問題があります。何を崇めるかにより、その人自身も変わります。神性を単なるモノへと引き下げてしまう人のことをイスラームではムシュリクンと呼び、人間の行いの中でもとりわけ自分の性質を貧しくする行いだとしています。

55. イスラームでは、仕事はどう考えられていますか

仕事はイバーダと呼ばれ、信仰行為とされています。人は仕事を通じて力を発揮し、文明をつくり上げていきます。社会を豊かにし進歩させるための行動は、私たちが仕事を行うことにあたります。また、できるだけ自己実現ができるような仕事を見つけることも大切です。なぜならそうした仕事の中でこそ、自分の情熱を表現することが出来るからです。仕事の中で発揮される能率性や、聡明さや、寛大さのおかげで、私たちは自己形成を行うことができ、同時にアッラーへとより近づくことができます。

56. アッラーの預言者ムハンマドはどんな人物ですか

ムハンマドは西暦 **570** 年にマッカで生まれました。ムハンマドの父親は彼が生まれる前に亡くなり、母親も彼の生後しばらくして亡くなったため、小さい時は叔父たちに預けられました。ムハンマドの親族は勢力のある部族のクライシュ族でした。彼が成長するにつれてその正直さ、寛大さや誠実さが人々の間で知られるようになり、争いごとがあると調停役に呼ばれました。歴史家は、ムハンマドは大変落ち着きがある人物で、よく瞑想をしていたとしています。

また、ムハンマドには非常に精神的な面があり、当時の社会に蔓延していた退廃性を快く思っていませんでした。そしてジャバル・ヌール、つまり「光の山」と呼ばれるヒラー山の頂上近くにある洞窟で瞑想を行うことを習慣にしていました。

ムハンマドが **40** 歳の時に、いつものように瞑想を行っていると天使イブリーズが現れ、アッラーの最初の啓示を彼に伝えました。啓示は **23** 日間続き、このときの啓示全体が「クルアーン」と呼ばれるものです。

イブリーズから受けた言葉、そしてアッラーが啓示した真実をムハンマドが人々に伝え始めたところ、彼とその信奉者たちは迫害を受けるようになりました。やがてそれが激化したため、**622** 年にはマッカから移住するようにとの神の啓示が下りました。これがヒジュラ、つまり移住と呼ばれるもので、ムハンマドとその一団はマッカから **16km** ほど北にあるメディナの町に移り住みました。この年がイスラーム暦の元年とされています。

それから数年の月日が過ぎ、預言者ムハンマドと信奉者たちはマッカに再び戻るができるようになると、敵だった人々に許しを与え、最終的なイスラームの確立に至りました。ムハンマドが **63** 歳で亡くなったときには、アラビア半島のほとんどがイスラーム化しており、その **100** 年後にはイスラームは西はスペイン、東は中国まで広がっていました。

57. シーラとは何ですか

シーラは、ムハンマドの歴史的伝記というよりは、ムハンマドの生涯から重要なエピソードを集めたものです。イスラームにおけるムハンマドに関する知識というのは、決して秩序だった厳密なものではなく、むしろ人々が従うべき象徴的規範にあたります。ムスリムは、預言者ムハンマドについて知っていることや、アッラーの親しい友人たちが伝える事柄を通じて、彼を愛するようになります。預言者の生涯を歴史の本から「学習する」わけではありません。ムハンマドのエピソードというのは単に伝記という形には収めきれず、まさにその点に規範とされる彼の偉大さがあります。

58. 預言者ムハンマドは「夜の旅」を身体ごとに行ったのでしょうか、それとも精神だけが旅したのでしょうか

ハディースでは、預言者ムハンマドが夜の旅をしたときには「眠りと覚醒の間」にあったとされており、これについては全く異なる二つの意見があります。まずムスリムの大多数は、預言者は心身ともに旅をしたと考えています。その考え方では、タウヒード（神の唯一性）の経験と人間の物質性を相容れないものとはせず、イスラームに特徴的な、ものごとを分割ではなく統合するという側面が反映されています。一方で、精神的そして身体的にもあのような旅をしたと考えるのは、キリストの昇天と同じくらい教理的であり、信じがたいと考えるムスリムもいます。イスラームでは何を信じるべきかを人に強要はしませんが、シャーマンたちの魔術的飛行や神話に現れる英雄たちの地獄への旅は、この現象を理解する手助けになるのではないのでしょうか。これまでのところ、預言者ムハンマドの夜の旅は、それがより完全かつ真実性の高いものとなるよう、「身体的に行った」といわれています。つまり、夢ではないとされています。現在では、シャーマンはある経験を通じて、知らなかったことを知るようになることがあるとわかってきています。そのため、これまでにはばかげた話とか、偽りやデタラメとされてきた問題への理解がすすんでいくのではないのでしょうか。

59. ムスリムはムハンマドを「神格化」する誘惑を感じたことはありませんか

上記の「夜の旅」のように精神的説明を必要とするいくつかの事例を除いては、ムハンマドの生涯は決して神話的ではありません。彼はごく普通に生きた一般的な男性でした。夫そして父親であり、後には孫ができ、ラクダを飼い、商人でもあり、当時のアラビア半島では一般的だったように時として兵士でもありました。そのようにムハンマドが平凡であったことは、将来のイスラームにとって大変重要なものでした。彼は時には間違いを犯し、すぐにそれを認め、何か決めるときには周囲に相談をしていました。人々は預言者たちを神格化し、その存在を自分たちから遠ざけ、預言者たちの神性を言い訳にしている意味で彼らを真似ることをやめてしまいがちです。ムハンマドはアッラーのご加護を受けましたが、それはムハンマドが無原罪の存在にされるためではなく、ムスリムの人々に神格化されないためであったのです。

60. 預言者ムハンマドにユーモアはありますか

預言者たちはたいい厳肅な顔つきで表現されています。もしそのうちの一人あるいは全員がおどけた表情をしていたら、本物の天の預言者であることを疑われかねないという心配から、後世に伝えられにくくなったことでしょう。

幸いなことに、ムスリムは預言者ムハンマドを神格化せず、彼を飾ることなく在るがままのひとりの人間として捉え、彼の人間的なユーモアも伝えています。アブー・フライラによれば、預言者が冗談を言っているのでサハーバ（仲間たち）が驚いたと伝えられています。それについて聞かれた預言者は「冗談はいうが、私は冗談の中でも嘘はつかない」といいました。このように生き活きとして愛にあふれた人物を、無口で神話的で面白みのない人物として伝えるのは、真実を曲げることになります。

ムハンマドは神との合一という恍惚状態を経験し、そこで自分が見聞きしたことを話すときにも笑うことがよくありました。ムハンマドには大変ユーモアのセンスがあり、現実社会の些細なことも彼に笑いを誘いました。例えば、ある男が天国に最後に到着すると（すでに人がいっぱい）場所がなかったため、神に何度も行ったり来たりさせられる話をしたときには、「奥歯が見えるほど」笑いました。また、アッラーの審判のときに、ある男の身体の一部が男のことを告発した話をしては笑いました。そのほか、神の審判で、ある男の悪い行いが善い行いに変わり、自分の犯した大きな過ちが勘定に入れられなかったときの困惑した様子を語りながら笑いました。アッラーが天国の人々を歓待するために、パンを作るように世界をこねあげるのを語っては、笑いました。こうした話で笑えないのは、イスラームの道（ディーン）や神の超越性に関することを、自分たちの背負った荷として自惚れを満たしている私たちです。とはいえ、最後の日にアッラーは笑いながら顕現するであろうことを、ムスリムは知っています。

各々の偶像と崇めていたものに従い、あらゆる民族が呼び出され、やがて神が現れ、「誰を待っているのか」というだろう。そして「私がお前たちの神だ」、「姿を見せてください」というだろう。そして神は笑いながら姿を現す。

つまり、笑いを知らないムスリムは、ムハンマドの前でどう振舞うべきかわからないでしょう。笑わないムスリムは、アッラーがいかに笑うかわからず、最後の日に困り果てて、誰に従えばいいのかわからなくなることでしょう。

61. なぜムハンマドは「預言者の封印」なのですか

「預言者の封印」とは、預言者たちの中で最後の一人という意味です。ムハンマドが最後とされたのはなぜでしょうか。それは、ムハンマドほど「何も持たない」預言者は存在しようがないからです。彼以前の預言者に目を向ければ、例えばシッダールタは王子であり、モーゼはエジプトの王ファラオの宮廷にいました。老子は書庫の記録官で、イエス・キリストは一介の大工の息子でしたが、少なくとも字を読むことはできました。しかし、ムハンマドは字も読めま

せんでした。アッラーは、預言者が文盲だったことを通じて人間に大切なことを示しています。それは、人間の無垢な心こそが天の啓示を受けることを可能にするということです。人間には何一つ欠けていません。必要なのは、ただ自分を空にすることだけです。人間にとってわかりやすい特徴をアッラーに与えて理解しようとするのは間違っており、アッラーはアッラーのままに受け止めるべきです。天啓もそれと同様であり、天啓に人間の手で何かを加えることは、アッラーに異質な覆いを被せてしまうような行いです。ムハンマドは、高名な預言者であれ、あまり知られていない預言者であれ、全ての預言者と自分を同一視し、あらゆる預言者はみな同じだとして、弟子たちに対しても預言者の中で区別をすることを禁じました。

62. なぜムハンマドが文盲だったことが強調されるのですか

ムハンマドが文盲だったというのは全くの事実であり、それは天啓が本物であることを表しています。天使ジブリールは 3 つの命令を通して、ムハンマドが文字を読めないこと、つまり天啓を受け入れるべく空であることを確かめました。また、預言者ムハンマドは文盲だったことにより、かえって普遍的な預言者となりました。彼を通して、個々の人間や文化的側面が加えられない、普遍的に通用する天啓がもたらされたのです。スーフイーは「無知を王の命令のように役に立てよ」といい、一般的に信じられていることを自分の無知で砕くことを説いています。文盲の預言者ムハンマドは、一般知識から解放された状態でアッラーの前に立ちました。「自分を空にして、神によって満たされるようにせよ」、これがクルアーンを通してムハンマドに啓示された象徴です。

3. クルアーンとは何ですか

クルアーンは、アッラーがイブリーズを通して預言者ムハンマドに下した言葉をそのまま書き起こしたものです。まずムハンマドがこのアッラーの啓示を自分の記憶にとどめ、そして仲間たちに言葉で伝え、ムハンマドの存命中に写字生が一字一句確認しながらその書き取りを行いました。それ以来クルアーン的全 114 章には一文字も手を加えられておらず、14 世紀前にムハンマドに啓示された時から、細かい点に至るまで変わらずに残されている唯一かつ驚くべき文書なのです。

64. クルアーンは何に関するものですか

クルアーンはムスリムの人々が確かだと考えることの土台であり、人間に関する一切の事柄、つまり知識、信仰、法が含まれています。さらに、公正な社会に必要な基本事項、人々がとるべき適切な態度、バランスのとれた経済制度に

ついても示されています。しかし、正確には、クルアーンがそうした一つあるいは種々のテーマを取り上げているとはいえません。クルアーンに作者はなく、それ自体が天啓そのものであり（アッラーの言葉が書きとめられたものという意味で）、それを耳にする人に感動を呼び起こします（アラブ語で聞かれたときに限りますが）。また、クルアーンは精神的分野に属していますが、同時に、バラカ（神の恩寵）を生み出し病人の治癒にも使われることから、身体的なものでもあります。

65. イスラームでは、クルアーンが人為的に操作されていないことをどのように証明していますか

現在、私たちは記憶力にあまり重きをおきませんが、口承文化の歴史では、ムハンマドに付き従った人々の記憶だけに基づき口伝されたクルアーンに、たいへん信頼が置かれています。キリスト教ではキリストに付き従ったのは 12 人でしたが、イスラームではムハンマドに従っていた人々は数百人いたのですから、かなり信頼性が高いといえるでしょう。

66. クルアーンにある日常的な問題に関する部分も神の啓示なのですか

そのとおりです。そうした部分で語られているのは、日常性の超越です。クルアーンでは基本的に、それを詠む人はまず揺さぶられ、振り動かされます。人は日常生活から引き離されて超越の世界へ行き、そしてまた元の世界に連れ戻されます。表層界と不可視界の間を行き来して、人間を神の真実から引き離すものをふるい落としします。クルアーンはある時代のある言語ですが、ムスリムにとってアッラーが時を超越してアッラーであるように、クルアーンの言葉もまた、古びることはありません。あるハディースには「我（神）は時間である」と記されています。ムスリムにとっては、日常の出来事がすでに超越的経験なのです。西洋的思考では、時の流れの中で起こるできごとを「虚しい」といい、軽んじますが、ムスリムの世界観はそれとは大きく異なります。

67. （クルアーン以外に）聖典は存在しますか

存在します。スンナという預言者の言動を集めたハディースがそれにあたり、ムスリムにとってクルアーンに次ぐ第二のムスリムの拠りどころとなっています。ハディースは、預言者ムハンマドの言ったこと、行ったこと、認めたことについての正統とされる説話です。スンナを受け入れることは、イスラームにおけるムスリムの条件の一つです。しかし、スンナはムハンマドの思想が形を変えて宗教教義になったものではありません。

イスラームはクルアーンから創られたのではなく、スンナは私たちを救いへ導く「教理」から創られたのでもありません。カトリック教会には外側からやって来る教理があり、イスラームには自己の内側からおこる推量があります。また、ムスリムは「信仰心がある」ということも正しくはありません。ムスリムであることは現実を受け入れることであり、現実世界そのものが神でありアッラーなのだと思えることです。そのため、アッラーを意識するために必要なのは感覚を研ぎ澄ますことだけだと考えることもできます。ムスリムはアッラーを「信じる」のではなく、この世の万象に神を「感じて」います。

クルアーンから教義をつくることはできませんが、その理由の一つはクルアーンの解釈方法が限りなくあることです。キリスト教のように、ひとつの教会がどの解釈方法が宗規に適しているかを定めるわけではありません。また、スンナとは、預言者ムハンマドがどのように超越に至ったかを理解する助けとなるだけです。ムハンマドが伝えたことを真実だと認めるには、各自が自分の経験に照らして確かめる以外に方法はありません。ムハンマドも自分の行動が書かれて残されることを望みませんでした。なぜなら後の世で、彼がある行為をどういう状況でしたか、ある言葉をどんな意図で口にしたのか正しく理解される保証はなかったからです。

68. スンナに従うとはどういうことですか

ムスリムには、預言者ムハンマドの言動から深い意味を汲み取り、それに習おうとする者がいます。また一方で、たとえ意味を理解していなくてもムハンマドの食事の仕方や寝かたまであらゆることを真似て、彼の秘訣を自分の生活に取り入れようとする者もあります。預言者の生活をまねるのは健康にもよいことですが、固執しすぎる必要もなく、スンナに従うため椰子の葉の上に寝たり、ラクダに乗って旅をしたりすることはありません。預言者ムハンマドの真のスンナとは、状況に応じた解決策をみいだす能力を高めていったことです。

69. イスラームは神学をどう受け止めていますか

イスラームでは、神学で人心を乱すことはありません。地面に額をすり付けるスジュドを義務付けるなど、より具体的な方法で人々を導きます。ムハンマドは、当時のアラビア半島でキリスト教からさまざまな問題が生じているのを目にし、イスラームではそのように神学に端を発する対立が決して起こらないようにと望みました。神学によらない精神性が伝えることこそ、アッラーの表象なのです。「イスラームを身体で理解せよ、身体には多くの知性が備わっているのだから」と、アヴェロエス（別名イブン・ルシュド）もいいました。イスラームでは、人間には五感ではなく十二の感覚がある、といます。アッラーの存在は理性で理解するのではなく、そのまま受け入れるべきです。アッラー

は瞬間ごとに人間を粉々に打ち砕き、すぐにまた元に戻します。その全てを受け入れて生きることがイスラームなのです。

70. イスラームではアッラーの存在をどのように証明しますか

ムスリムの人々は、周囲のものごと全てをアッラーの存在を示す論拠としています。この世界が空虚に感じられることがあったとしても、世界は確かに存在しています。ムスリムの人々にとって、「そこに存在する」という事実こそが、言葉を越えた力によるものなのです。私たちはこの世界において、外で起こるいろいろな事柄や内面に起こるさまざまな感情を経験していますが、それらは全て単なる偶然のようにみえて、実は代替不能で不可避な「そうあるべくして」あることばかりです。この世が現実であることが、アッラーの存在を表しています。アッラーの存在を認めない人々に対し、クルアーンに示された唯一の論拠はこれです：「椰子の木々を見なかったのだろうか、ラクダを、そして雨が降るのを？」

71. アッラーはキリスト教徒における神のような存在ですか

エックハルト、シレシウス、ヤーコブ・ベーメ、ピエール・ティヤール・ド・シャルダン（いずれも偉大な神秘主義者）といった人々が至ったごく特別な理解を別にすれば、アッラーは一般的な「神」の概念よりも大きな存在です。イスラームの人々にとり、教会の神は戯画やパロディーであり、人間の欲求不満が宇宙的次元で表されたようなものです。アッラーは「神」ではないともいえます。神というとき、神ではないものに対して神であるということになります。アッラーには対をなす相手はありません。アッラーとこの世界を対極に置くことは不可能です。アッラーのみが残り、その存在ゆえに世界が存在します。そして、もしアッラーが「全てを内包し」ており、あらゆるものがその内部にあるとすれば、世界はアッラーの中に浮かんでいるといえるでしょう。アッラーは、一般に「神」という語から理解されるような神ではなく、また、「神」として考えられている属性を持つわけでも、そうした性質を備えているわけでもありません。アッラーの存在は、それを生きて経験することだけが可能です。その点からもアッラーは「神」とはいえませんが、人間の必要性に応じてつくられた定義を超えた存在です。霊魂や物質とも異なります。概念でもありません。いずれにしてもアッラーとは非概念的な存在で、私たちの日常に緊張を与え、警告を發し、私たちの生を拡大させていきます。

72. ムスリムはアッラーが玉座に座っていると考えているのですか

アッラーの玉座や足のせ台、聖版、そしてペンは物質ではありません。かといって文学上の喩えでもありません。それらは真なる存在の象徴であり、預言者ムハ

ンマドが精神的巡礼の旅を行ったときに、そうしたものが世界を構成しているということを認識しました。アッラーの玉座はこの世の森羅万象の理を表しています。

73. 現代において神の怒りや寛容性について語ることに意義はあるでしょうか

無菌状態の（清廉潔白な）神を想像する人には、クルアーンにみられるガダブ（怒り）やリッダー（満足）といった表現は時代錯誤にみえるかもしれません。しかし、アッラーは現実世界と深く関わっており、人間にとって世界は怒りに満ちていたり穏やかであったりときさまざまな状態を呈します。そうした森羅万象の根源は唯一神だとムスリムの人々は考えています。そのため、天啓に従いアッラーを表現するときそうした言葉が使われるのです。

74. ムスリムは自由意思についてどう考えていますか

人間の自由はこれまでずっと、イスラーム思想にののしり合いや行き違いをもたらす原因となってきました。例えば、イスラーム神学者（*mutakal-limûn*）がクルアーンやハディースを盾に取り、自由意志を槍玉にあげる一方で、ムスリム哲学者はギリシア思想から学んだ自由を擁護したりしています。そのため、人間の自由を否定し、「すべては書かれている」とするカダル（運命）を語る者には宿命論者のレッテルが貼られてしまう一方で、人間の自由を要求するファラシーファ（ギリシア由来の哲学）系のムスリムたちは、ギリシア思想に冒された異端者となじられてしまいます。

伝統的イスラームから始まり（イスラーム神学者や神秘主義者も含め）、イスラームでは一般的に、人間の意志や気まぐれというのはアッラーが人間に屈することとして、否定的態度がとられてきました。しかし、イスラーム内部の思想的相違よりも人々を驚かせたのは、人間は神から独立した存在だとするまったく異なる考え方の出現でした。預言者を始めムスリムの人々は宗教教理をつくりそれを信じるのではなく、一定の意識を維持できるような行動を人間や社会に呼びかけています。ムスリムの基本は教理ではなく、行動にあります。そのため、現実を生きることを、判断することに置き換えてしまうヨーロッパと比較したときに、イスラームは閉鎖的に見え、イスラームの「人間の運命が炎の中となるか楽園となるかは、初めから書き定められている」という考えは、数世紀前に超越経験から離れて文明化をとげた人々の心を惑わすと思われるでしょう。自分を文明人と考え、社会に対して閉鎖的な個人主義に染まり、個人主義こそ洗練されているとする人々は、ムスリムに対して眉をひそめて距離を置こうとします。しかし（イスラームの共同体のように）集団全体の健全性を目指す文化に根ざした人々は、感動にふるえる心を持ち、ガフラ（神を忘れ安楽に流されている状態）や破壊、混乱状態を前にして心を痛めます。そのよう

に人間を豊かにすることこそが天啓の目的であり、宇宙について観念的な説明をすることではありません。

結局のところ、私が同じ文化を共有する誰かに「あなたはムスリムとして人間の自由を信じますか」と質問されたとすれば、私は「盲目的に信じます」と答えるでしょう。さらに「自由を擁護することは、伝統的イスラームの（自由擁護に対する）苦い思いと矛盾することになりませんか」と聞かれたら、「いいえ。自分の中で、人間の自由をアッラーに対立させるのではなく、アッラーの中にあると考えるなら問題はありません。アッラーの中では人間は自由です。」と答えるでしょう。

75. カダル（運命）の考え方からムスリムは宿命論者といえるのではないのでしょうか

ムスリムは真なる存在に絶対帰依をしていますが、宿命論者ではありません。なぜなら、真なる存在との出会いはジハード（内的または外的戦い）を通じてこそ、得ることができるからです。人間の意志はカダルの一部をなしています。不運に甘んじるだけでなく、それをはね退けねばならず、そのためには虚像崇拜を廃し、アッラーへの帰依を行うことが必要です。

76. 不運はどう受け止めるべきとされていますか

アッラーのおかげでよい目をみると、人は「恵みを得た」といい、アッラーにつらい目にあわされると「屈辱を受けた」と考えます。アッラーは人々を侮辱するか賞賛するかのどちらかだと考えますが、アッラーにしてみれば単に何かを為したに過ぎません。侮辱にも賞賛にもふさわしい人間はありません。人生はその両極端を行き来しており、その両方から学ぶべきことを学べるかどうかを試されているのです。いかにして自分を超越るかということが重要です。自分の判断（何が正しくて何が正しくないか）を見失わず、それに従って行動し、同時にそれを越えていくことが大切です。あなたを取り巻く宇宙は、あなたの答えを受けるために在るのです。出した答えが適切でこの世界と調和していることもあるでしょうし、その反対のこともあるでしょう。神の恵みを受けたとか受けなかったという考えは、思い上がりや宿命論に陥ることにつながり、人生との関わり合いを放棄し、アッラーの存在しない世界に身を置かせることとなります。人生と深くつながるための行いとは、感謝の心を持つこと、そして自分自身を知ることです。ものごとがうまく運んで思い上がっているときには、人はアッラーの御徴が特別な階級章として与えられたと考えますが、それは社会において上流階級の人々がするのと同じことです。

77. ムスリムは死をどう考えますか

死は、人間に残されている最後の虚像です。そして、イスラームは虚像を打ち砕いていきます。人の生には虚像や偶像があふれており、そのひとつが死です。私たちは、死を永遠で最終的なものと考えていますが、アッラー以外に永遠かつ最終的な存在はありません。死を冒険だと考えることこそ、まだ私たちに残っている虚像です。人間は死について駄弁を弄したり、恐れるべき存在はアッラーだけであるにも関わらず、死を恐れるという誘惑によく囚われたりします。死は生の一部に過ぎません。アッラーこそ死の神です。

78. 死後には何があると考えられていますか

死が人間存在の終わりではないとされますが、死後の出来事についての天啓の内容ははっきりとわかっていません。一般的にムスリムは、自分たちとこの世の創造物は全てアッラーの元へ戻ると考えています。しかし、ジャンナ（楽園）やジャハナム（沼）、アル・ヤウム・アル・キヤーマ（審判の日）がどういふものかという解釈の仕方は人それぞれです。イスラームには「教会による総合教育」にあたるものがないため、ムスリム全体に受け入れられる「公式の」解釈は存在しません。ムスリムの多くは、例えばクルアーンにあるナール（業火）はある特定の場所を指しているのではなく、クルアーンを聴く人の心を揺さぶるために投げかけられる *miḡal*、つまりイメージだと解釈しています。そのように、クルアーン全体を構成している象徴と同じように、クルアーンの各節にはさまざまな次元における：解釈があります。ムスリムの全体合意では、生は死で終わらないとされています。しかし、死後が具体的にどういったものかについての全体合意はありません。

79. 「楽園」と「烈火」は比喩なのですか

「楽園」と「烈火」は喩えではありません。一人ひとりの集合である人類全体は、「アーヒラ（来世）」と「復活」を実際に体験するでしょう。しかし、それがどういうものでどのように起こるのかを人間が予測することは不可能であり、またそれを表すには預言者ムハンマドの言葉を伝える以外にふさわしい言葉はありません。一人ひとりが、自分の知性と感性を通して語り尽くせぬこの問題を理解するべきで、最終的にはアッラーが言葉の意味するところを示されることでしょう。しかし、人間が理解しやすいようにかみ砕いてしまうと、強いイメージから本来もたらされるべき力が弱められてしまいます。そして創造されたイメージは本来、頭よりもむしろ身体に向けられており、まず心で、次に身体全体で受け止めるべきでしょう。この一連の問題から私たちは、ものごとを理性で判断することの有効性に疑問を投げかけ、過剰に具体化することで想像力が制限されるのを防ぐことが考えさせられます。

80. イスラームではどのように埋葬を行いますか

ムスリムが亡くなったときには、その身体は浄められ、清潔な麻の白布にくるまれ、祈禱が行われた後にできるだけ亡くなったその日に埋葬されます。この儀式はムスリムにとり、愛する人にするのできる最後の行いであると同時に、この世でその人が過ごしたつかの間の時を思い出す機会ともなります。イスラームでは水はラフマー（神のお慈悲）とされており、水が遺体に達することを重要視しているため棺桶は使用せず、直接土に触れるように埋められます。墓の上には樹木が植えられることが多く、ひとつの死にひとつの生を与えます。こうしたことから、遺体を焼却してしまい、もう人間には不要となった私たちの亡骸を他の生物のために役立てないのは、利己的で狭量な行いと考えられています。

預言者の仲間たちの間では、亡くなったその場所で埋められるのが習わしとなっていました。アッラーの友が苦しみ、命を落したその場所にはバラカ（神の祝福）が広がります。

81. モラビト（聖人の墓）を訪ねるのはハラム（禁止事項）ですか

聖人の墓を訪れることを礼拝行為だと考える人にとっては、その行いはハラム（禁止事項）になります。抵抗感があるにも関わらず行う場合、無駄である以上に悪い行いにもなります。スーフイー（神秘主義者）はシャイフ（導師、賢人）のバラカ（神の恩寵）を求めて墓に行くことで、信仰心を取り違えていることに気付いていません。スーフイーのことはスーフイーに帰すべきです。

82. イスラームは私的な信仰ですか

私的な振興ではありません。この問題は、イスラームを外から研究するヨーロッパの人々にとってはわかりにくいテーマの一つでしょうし、ほかの宗教からイスラームに改宗した人々にとっては受け入れにくいことだと思われます。ヨーロッパでは通常、精神生活は個人的あるいは私的な感情、決定、約束と同じ次元におかれており、人々は精神性を社会的なものとは考えていません。しかし、イスラームとは社会におけるひとつの態度であり、絶対的存在に向き合うためのある方法であり、それを一人で享受することではありません。イスラームとは、集団で実践する超越に至るための手段であって、隅っこのプライベート空間である信仰ではなく、社会にみられる横暴を見逃して共犯者になることでもありません。ムスリムになることは人々の身体に流れる血にすでに備わっています。それは信条や信仰でさえもなく、ひとつの感性ともいべきものです。社会の一部をなし、社会の中で生きるという感性なのです（アリ社会のよ

うに)。イスラームは私的次元には属さず、誰かに個人的権利として要求されるものでもなく、共同体の範疇にあるものです。

83. なぜイスラームでは精神性には共同生活が重要だとされているのですか

ムスリムにはもともと人々と集う傾向が備わっており、その反対の拡散（フルカ）は破壊につながるとされています。預言者ムハンマドは反乱や悪略、悪意や不和、そして連帯感に欠けた個人主義的な傾向に対して徹底的に戦いました。イスラームは仲間と共にいることを我慢できない人間ではなく、社会性のある人間のためのものです。一人孤独な中での精神性は誤りであり、単なる自己満足に過ぎません。他人といるときにこそ、人は自分自身を知ることができ、自己の欠点を矯正することもできます。自分以外の人間と触れ合う面倒を引き受けることも大切で、それが確実な進歩になっていきます。私たちは兄弟といることで自分自身に向き合うようになり、それこそが自分自身を本当に知るための唯一の方法です。神の唯一性は、人々と共にでなければ享受することはできません。

84. イスラーム社会はなぜ「通りの文化」なのですか

イスラームの地を訪ねる人の誰もが気付いた訳ではないかもしれませんが、イスラームでは、通りや市場に出ることや、人とお茶を飲むことやが大変好まれます。ハディースによれば、人々の集まりにはバラカ（神の祝福）があるとされます。預言者ムハンマドは人と人との間に空間があること、つまり人々が分散していることを嫌い、預言者の家は人々でごった返していました。人は人を恐れる必要はない、それがイスラームの教えです。一人ひとりが他人に依存するようにすべきです。この考えはクフル（制度）のそれとちょうど反対です。その理由は、人のつながりは個人のレベルを超えた権力を弱めることにつながるということです。被支配者間のつながりが弱ければ弱いほど、国家は強くなるものです。

85. ムスリムにとって慈悲とは何でしょうか

ムスリムはタウヒード、つまり全ては根源的に一つであることを信じています。兄弟に善を行うことは道徳的行為であり、自分から相手に対しての「慈悲」であるだけでなく、自分とは別に存在してみえる相手と自分をつなぐ愛を通じて、この世界への知識を深めることになります。それは、フubb（愛）を通じた現実理解であり、ラフマー（慈悲）を介したこの世界との結びつきです。兄弟の中にこそ、超越的属性をもつアッラーの知識を見出すことができます。絆を強

めることで、アッラーと出会うことができます。創造物の互いの絆（ラヒーム）は、アッラーの美名の一つ（ラヒーム、慈愛あまねきもの）にもなっています。

86. イスラームでは高齢者にどのように接しますか

イスラーム世界には高齢者のための施設はありません。両親が人生の困難な時期にさしかかったときに世話をしようとする努力することは、名誉であり、神から与えられた幸運であり、精神面で成長するためのまたとない機会ともなります。アッラーは、親たちに大きな思いやりをもって接し、私たちが何もできない子供だった頃に、両親が自分たちのことよりも子供のことを気にかけてくれたことを思い出すようにいっています。感謝の心を持たない者は、イスラームの信者ではありません。

クルアーンに次のような箇所があります。「お前たち（アッラー）以外の何者も崇めてはならぬと主のきついお達しがあつた。それからまた自分の両親には、その一方、または両方ともお前のところで老齢に達した場合、できるだけ優しくいたわってやるようにと。決して親に向かって『ちえっ』などと言ってはならぬ。言葉荒げて叱ったりしてはならぬ。丁寧な言葉づかいで話しかけよ。そして、優しいあわれみの心で、従順の翼をそっと二人の頭上に降ろしてやるよう。『主よ、なにとぞ、この二人にあわれみを垂れ給え、幼い頃、二人が私を大事に育ててくれましたように』、と祈ってやるよう。」（クルアーン第 17 章 23-24 節）

イスラームでは、目上の人々に尽くすことはもっとも大切な義務であり、また年配の人にはそうした待遇を受ける権利があるとされています。また、年老いた人々が気難しくなっても、子どもを叩いたりするのではない限り、それに対していらいらするのは軽蔑すべき行いとされています。

87. イスラームでは母親にどのように接しますか

イスラームでは母親が尊重されており、預言者ムハンマドも「樂園は母親の足元にある」といっています。母親や母性についてイスラームの智恵が伝えることはかなりインパクトが強く、それに耳を傾けられる人は多くないのではないかと思います。女性は自分の身体から新しい生命を生み出すアマナ（責任）、つまりアッラーの美名の一つである「ハーリク（創造者）」をアッラーから与えられています。母になることは、アッラーの世界において生き物にとって最高の経験です。女性は自分の身体を通じて完全体からの分離を経験し（出産中に）、子どもへの愛を通してタウヒード（神の唯一性への一化）を経験します。母になることは絶対的献身を可能にすることであり、最大の愛の経験であり、

ジャンナ（樂園）の創造でもあります。母になることはアッラーを成すこととすることもできるでしょう。

88. ムスリムはこの世の快樂をどう受け止めますか

ムスリムは、「快樂はそれが許可されていない限り、悪いことである」という考え方をして人生に逆らうことはありません。むしろその反対です。あらゆる喜びや快樂は、その反対にならない限りは善いこととされます。そのためムスリムの精神生活では、ものごとを享受しないことではなく、享樂に我を失わないことに重きが置かれます。たいていは快適さに溺れてしましますが、スーフィーではショック療法をとり、それを放棄させようとしています。とはいえ、喜びを放棄することはイスラーム的ではありません。なぜなら、人間は喜びを通じてより深く生に関わり、アッラーの顕現であるこの世界を受け入れていくからです。

89. イスラームでは何が善あるいは悪ですか

イスラームには、キリスト教にある絶対的な「善悪」は存在しません。イスラームには、**jair**（寛大さ、豊富さ）と **ma'ruf**（社会的に良いとされる）という「善」にあたる二つの言葉がありますが、絶対的な善という概念はありません。善は常に誰かのために行われます。

- **Jair** は寛大さが自分の周囲に満ちるようになること。社会における **Jair** は精神的豊かさや調和を表します。
- **ma'ruf** は社会全体のためにプラスになると同意されたこと。イスラームをつくり上げるとは、善を行うことではなくより良い社会となるよう働きかけることを指します。

私たち人間はこの世界を理解することはできません。ムスリムでない人がムスリムを理解しようとする際にもっとも難しいのは、以下のことでしょう。私たちは神の為した世界を前にしてただひれ伏すのであって、それに判断を下すではありません。神の世界では、善いあるいは悪いと思われることに従って行動しますが、善悪についての自分たちの考えを客観的概念にまで持ち上げることはありません。

90. イスラームは身体についてどう考えていますか

イスラームでは、自分自身を通じてアッラーへの旅を行うことを呼びかけます。どんなに信仰心が低い人も、全ての人に身体が備わっていることに異論はないでしょう。イスラームでは誰にでもあるものである身体を起点と捉えています。

身体的欲求も含め、自分が必要とするものを満たすことがイスラームでは義務となっています。身体がフィットラー（本然の調和状態）になれば、倫理面も正しい状態に保てません。きちんと食事を摂っていない人や、睡眠を充分にとっていない人、満足の行く性生活を送っていない人は、神を想像したときに異様なものや、創造物を苦しませる存在を想像することでしょう。身体とは、人間のナフスつまり自我の母体であり、ムスリムは自分の身体を通してアッラーの声に耳を傾けています。

91. なぜムスリムの人々は、用を足しながら何かを読むヨーロッパの習慣を嫌うのですか

その理由は、口承の伝統が受け継がれる社会における書かれたものへの敬意にあります。ものが書かれるためには一定の努力や、注意力や配慮が必要とされます。また、一般的に、生物としての基本的な用を足すときに他のことに気を散らすのはあまり薦められる行為ではありません。なぜなら、それは特別な超越の瞬間であり、そこで私たちの本質がゼロの瞬間に戻り、その後の再生が始まるからです。

92. フィトラ（本然）に戻ることが重要だとすればなぜ宗教儀礼があるのでしょうか、自然や本質に生きるだけでは充分ではないのでしょうか

「ものごとを強いる」ことや宗教儀礼を定める必要性は、人間がナフス（自我）により混乱に陥ること、自然が過酷であること、人間の性質が扱いにくいということ、社会が人間性を奪ったり抑圧したりすることなどから生じました。宗教儀礼とは、日常生活の只中において絶対的な集中力を求められるひとつの鍛錬であり、日常性を神性へと変えるための特別な空間です。私たちは一定の場所や時間、空間を神聖と決めています。それはそれ以外の場所や空間や時間を俗とするためではなく、一定の場所や空間で鍛錬を行なって神霊の存在を感じ、それを周囲へと広げていくためです。伝統的社会では、「聖」とされていないものは、「俗」ではなく「神聖となりうる」場所、時間、行為でした。聖俗の区別は、神性を私的空間に追いやる考えが形をとったに過ぎません。ムスリムが目指しているのは、あらゆる日、場所、行いをイスラームとすることです。つまり、宗教儀礼は人間の本質の一部であり、一人ひとりがそれを聖へと変えていくべきなのです。

93. 犠牲祭で羊の生け贄を捧げることに、現代でも意味があるのでしょうか

意味があります。あまりに自然から遠のいてしまった人々に対して非常によい教えになります。羊の生け贄あるいは畜殺により、動物の肉を食べるのに自らは動物を殺さないというヨーロッパの偽善的な生き方について意識させられます。ヨーロッパでは、あらゆる種類の殺しに関して「殺しのプロ」（精肉屋、きこり、軍人、死刑執行人）が雇われます。

イスラームでは羊を屠畜することは家長の義務とされていますが、これは私たちが存在するために必要なものを自分で屠るための訓練です。さらに、鬱病、方向を見失った人、自分に甘い人、ノイローゼ、生真面目さなどに対する自然療法でもあります。私たちは羊の生け贄を通じて人間のもろさを確認し、時に怠惰に流される生活の、一秒一秒のために必要とされるものについて理解することができます。

94. イスラームの食事に関する規定は何ですか

ムスリムが遵守すべき食事に関する規定には、ユダヤ人のそれよりは単純ですが、禁止事項がいくつかあります。預言者ムハンマドは、身体はその人自身に影響を与えるもので、健康な食べ物を摂ることや健全な生活を営むことは精神的領域と決して無関係ではない、と述べています。

預言者は言いました、「アッラーに確信、そして健康を求めよ。確信を除いては、健康以上にすばらしい恵みはあるまい。」と。

95. なぜクルアーンでは豚やアルコール類を禁じているのですか

クルアーンでは「禁止」という語は使われておらず、代わりに「有害な」（ハラム、直訳すれば「あなたのためにならない」という意味）という言葉が使われています。アルコール類や豚、道端で屍骸となっていた動物を口にすることは明確に禁じられている訳ではなく、実際には、そういったものは害をもたらすと記されているだけです。しかし有害なものから身を引くようクルアーンで推奨されていなければ、人は神に近づくために何一つ行うことができず、またクルアーンは人の助けとはならないでしょう。神への超越的体験を求める心は、自分自身を大切にすることや健全な生活そのものから発します。身体を健康を気遣わない人は、精神に必要なものにも気付かないか、あるいは気付いたとしても非常識な方法によるでしょう。

96. イスラームでは麻薬をどう受け止めていますか

預言者ムハンマドは、あらゆる種類の麻薬を明確に禁止しています。クルアーンやハディースでは私たちの感覚を麻痺させるものは排されており、以下のハディースの記述にもそれがみられます。

スラーカ・イブン・マーリクの伝えるハディースによれば、預言者ムハンマドの前に、ぼろぼろの身体となった（直訳すれば「両目に泡を吹いた」）ベドゥインがやって来ました。彼が「預言者さま、私はラクダを何頭も持っていましたが、いなくなっていました。ラクダたちを5日間探し回り、ひどい空腹にさいなまされ、そこで1本の草（ハシーシュ）を見つけました。葉には5つか6つの角があり、上の方に切れ込みがあり、つんとする臭いで赤い枝がついていました。この草を食べたところ、頭がぼーっとなり、今は身体もぼろぼろになってご覧の通りの状態です。」預言者は答えました。「それはサクーンの木（ハシーシュの一種）で、それを食べても腹は満たされないものだ。その草を口にした者は、審判の日にアッラーの咎めを受けるだろう」（AL-ZIRIKLÍ, *al-A'âm*, III, 80 ページ）

実際に、このテーマに真面目な関心を寄せるムスリムであれば、様々なイスラームの論文で、あらゆる種類の麻薬使用について反対意見が述べられていることに気付くことでしょう。その一部はスペイン語にも訳されています **2** ([problema técnico. quizá mejor hacer este número más pequeño](#))。

預言者ムハンマドもまた、精神的高揚を得るために何かを服用したことはありませんでした。「知覚を開放して最高レベルの理解ができる」とされる物質を使うことは、私たちの精神的な道りにおける野心にほかなりません。わざわざ何かの手段に頼ったり無理をしたりせずとも、各人に適した理解レベルへの到達が、それぞれに起こるべきタイミングに起こるのですから。

97. ニューエージの宗教思想でイスラームが狭義のスーフィズムとしてだけ扱われていることについて、どう考えられていますか

現代のスーフィズム（神秘主義）は、見せかけばかりで品位に欠けています。それはイスラームを欠いたスーフィズムです。イスラームはキリスト教と同じように弱者のための慰めだと考える人もありますが、イスラームは、アッラーが人間へ課したひとつの挑戦すべき課題なのです。現在もこれまでも、イスラームとは、一人ひとりの人間の内面で何かを崩壊させ、アッラーへと解き放つことでした。しかし現代の宗教は、市場の需要に合わせ、その人が気分よくいられることに重きを置いています。スーフィズム文学の大半はその役割を果たしておらず、墮落しており、麻痺しているか理解されていないかのどちらかで

す。スーフィーの本当の経験とは、この世の終末を自己の身体で前もって体験することなのです。

98. クフル（隠蔽）はイスラームにどういった害を与えるのでしょうか

それは、イスラームをキリスト教化することを通じてです。つまり、イマームをキリスト教の聖職者に、イスラーム学者を神学者に仕立て上げることによつてです。例えば、サウジアラビアの宗教的指導者ラビをバチカン人にする事です。アキダ（イスラームの信条）をキリスト教の教理に、ムスリムの信心を正教風にする事もそうです。思想の自由やジハードを封じることも同じです。しかし、預言者ムハンマドの伝えたイスラームは教理ではなく、倫理観です。

99. イスラームの本質とは何ですか

ある時、イスラームとは何でしょうかと預言者ムハンマドに尋ねた者がありました。預言者は「al Islam qul-luhu adab」、つまり「イスラームの全てはアダブです。」といました。アダブとは、礼儀作法や儀典ではなく、人間の繊細な感受性を指します。人間に対してだけでなく、周囲の全てに対してアダブが必要とされています。アダブはまた、ものごとの真実に気付いたときに受けとる、全知の存在からの答えです。私たちは、瞬間ごとに必要とされている礼節をわきまえなければなりません。そうした「在り方をわきまえる」こと、つまり周囲の状況と調和を保つことは瞬間ごとに必要であり、それがイスラームの骨格を成していると預言者ムハンマドは考えました。

INDICE 目次

PRIMERA PARTE 第一部

1. ¿Permite el Islam la ablación del clítoris? イスラームでは女性器の切除が認められていますか
2. ¿Puede un musulmán pegar a su mujer? ムスリムは女性を殴ってもいいのですか
3. ¿El Corán manda lapidar a los adúlteros? クルアーンでは姦通者に投石刑が定められていますか
4. ¿Es el velo una forma de opresión para la mujer musulmana? ベールはムスリム女性への抑圧行為でしょうか
5. ¿Qué actitud tiene el Islam respecto a la menstruación de la mujer? イスラームでは女性の生理をどう受け止めていますか
6. ¿Puede un musulmán tener más de una esposa? ムスリムは妻を二人以上娶れるのですか
7. ¿Es el matrimonio islámico como el cristiano? ムスリムの婚姻はキリスト教徒の婚姻と同じでしょうか
8. ¿Hay hadices que reprenden fuertemente a las mujeres? 女性を強く叱りつけるハディースはありますか
9. ¿Por qué la mujer musulmana hereda la mitad que el varón? なぜムスリム女性は男性の半分しか遺産相続をしないのですか
10. ¿Qué piensa el Islam de la homosexualidad? イスラームでは同性愛をどう受け止めていますか
11. ¿Cree el Islam en los derechos humanos? イスラームで人権は認められていますか
12. ¿Está obligado un gobierno islámico a proteger a las minorías étnico-religiosas en su territorio? イスラーム政府には少数民族や少数派宗教の保護が義務付けられていますか
13. ¿Los derechos religiosos de las minorías son respetados en tierra islámica? イスラーム圏内で非イスラームの宗教を信仰する権利は守られていますか
14. ¿Tiene esta tolerancia fundamento en el Corán? イスラームの寛容さはクルアーンに根ざしているのでしょうか
15. ¿Pero no dice el Corán: “La única religión verdadera es el Islam”? 「真の宗教はイスラームのみである」とクルアーンにありますか
16. Los Profetas de otras religiones, para los musulmanes, ¿son verdaderos profetas? ムスリムにとって、他宗教の預言者は本物の預言者でしょうか
17. ¿Qué piensan los musulmanes sobre Jesucristo? ムスリムはキリストについてどう考えていますか
18. ¿Hay similitudes o disimilitudes entre el Corán y el Evangelio? クルアーンと福音書の共通点と相違点は何ですか

19. ¿Es cierto que el Corán habla mal de judíos y cristianos? クルアーンではユダヤ教徒やキリスト教徒は悪くいわれているというのは本当ですか
20. ¿Se pueden casar los musulmanes con mujeres de otras religiones? ムスリム男性は、他宗教の女性と結婚できますか
21. ¿Por qué una musulmana no puede casarse con un no-musulmán y un musulmán sí puede casarse con una no-musulmana? なぜムスリム女性は非ムスリム男性と結婚できず、ムスリム男性は非ムスリム女性と結婚できるのでしょうか
22. ¿Existe el proselitismo en el Islam? イスラームへの勧誘はありますか
23. ¿Un musulmán puede matar a otro musulmán que comete *ridda* (apostasía)? ムスリムはリッダ（背教）を理由に他のムスリムを殺すことができますか
24. ¿Es legítimo el *yihád* para convertir a los “infeles”? 「不信心者」を改宗させる目的の「ジハード（戦い）」は適法なのですか
25. ¿“El Paraíso se encuentra a la sombra de las espadas”? 「楽園は剣の影にある」のでしょうか
26. ¿Cuáles son las condiciones de una guerra justa? 「正当な戦い」の条件は何ですか
27. ¿Pueden los musulmanes oponerse al poder reinante? ムスリムは支配権力に逆らうことはできますか
28. Si el Islam legitima la defenestración de los tiranos, ¿por qué hay tantos pueblos islámicos en la miseria? イスラームで暴君の追放が法的に認められているなら、なぜ多くの人々が貧窮に苦しんでいるのでしょうか
29. Si el musulmán se ve obligado a vivir en países no islámicos, ¿cómo debe comportarse? 非ムスリム国家に住むムスリムはどう行動するべきでしょうか
30. ¿Cómo es la diversidad cultural de la Comunidad de Muhammad? ムハンマドのイスラーム共同体の文化的多様性とはどんなものですか
31. ¿Posee alguna originalidad la cultura islámica o todo lo ha cogido de acá y de allá? イスラーム文化に固有のものはありますか、それともすべて異文化からの借用でしょうか
32. ¿Qué postura adopta el Islam respecto a la investigación científica? イスラームは科学の研究に対してどういった姿勢をとっていますか
33. ¿Qué piensa el Islam de las teorías de Darwin? イスラームではダーウィンの進化論はどう考えられていますか
34. ¿Qué limitaciones pone el Islam al mundo del arte? イスラームでは芸術にどんな規制がありますか
35. ¿Está prohibida la escultura en el Islam? イスラームでは彫像は禁止されているのでしょうか
36. ¿Qué piensa el Islam de la magia y la adivinación? イスラームでは魔法や占いはどう受け止められていますか
37. ¿Por qué los musulmanes no creen en la reencarnación? なぜムスリムは生まれ変わりを信じないのでしょうか
38. ¿Cómo deben de leerse los libros de *Fiqh* (Derecho Islámico)? フィクフ（イスラーム法）はどう読み解くべきでしょう
39. ¿Se puede hacer interpretación libre del Corán (*ijtihád*)? クルアーンは自由解釈（イジュティハード）をしていいのでしょうか

SEGUNDA PARTE 第二部

40. ¿Qué es el Islam? イスラームとは何ですか
41. ¿Cuáles son los cinco pilares del Islam? イスラームの五柱とは何ですか
42. ¿Qué es la *shahâda*? シャハーダとは何ですか
43. ¿Es la *shahâda* una profesión de fe? シャハーダは信仰表明ですか
44. ¿Por qué se convierte alguien al Islam? なぜ人はイスラームに改宗するのでしょうか
45. ¿Cómo se convierte una persona en musulmán? ムスリムになるにはどうすればいいのですか
46. ¿Qué cambia la *shahâda* en el que la hace? シャハーダをすると何が変わりますか
47. ¿Qué es la *salât*? サラートとは何ですか
48. ¿Qué sentido tiene el *wudû'* antes de la *salât*? サラートの前に行うウドゥ（洗淨）にはどんな意味がありますか
49. ¿Qué es el *çakât*? ザカートとは何ですか
50. ¿Qué es el *siyam*? シヤムとは何ですか
51. ¿Qué es el *Hajÿ*? ハッジとは何ですか
52. ¿Cuál es el simbolismo del *Hajÿ*? ハッジに象徴されるのは何ですか
53. ¿Qué es la *Ka'ba*? カアバとは何ですか
54. ¿Adoran los musulmanes la Piedra Negra? ムスリムは黒い石を崇めているのでしょうか
55. ¿Qué piensa el Islam del trabajo? イスラームでは、仕事はどう考えられていますか
56. ¿Quién fue Muhammad, Mensajero de Al-lâh? アッラーの預言者ムハンマドはどんな人物ですか
57. ¿Qué es la *sira*? シーラとは何ですか
58. ¿Hizo el Profeta el Viaje Nocturno con el cuerpo o sólo con el espíritu? 預言者ムハンマドは「夜の旅」を身体ごと行ったのでしょうか、それとも精神だけが旅したのでしょうか
59. ¿Se han sentido los musulmanes alguna vez tentados de "divinizar" a Muhammad? ムスリムはムハンマドを「神格化」する誘惑を感じたことはありませんか
60. ¿Tenía el Profeta sentido del humor? 預言者ムハンマドにユーモアはありますか
61. ¿Por qué se dice que Muhammad es el "sello de los Profetas"? なぜムハンマドは「預言者の封印」なのですか
62. ¿Por qué insisten tanto los musulmanes en la ignorancia de Muhammad? なぜムハンマドが文盲だったことが強調されるのですか
63. ¿Qué es el Corán? クルアーンとは何ですか
64. ¿De qué "trata" el Corán? クルアーンは何に関するものですか
65. ¿Qué garantías ofrece el Islam de que el Corán no haya sido manipulado? イスラームでは、クルアーンが人為的に操作されていないことをどのように証明していますか
66. ¿El Corán que trata de cuestiones cotidianas también es increado? クルアーンにある日常的な問題に関する部分も神の啓示なのですか
67. ¿Existen otras fuentes sagradas? (クルアーン以外に) 聖典は存在しますか
68. ¿Qué es seguir la *sunna*? スンナに従うとはどういうことですか

69. ¿Qué actitud existe en el Islam respecto a la teología? イスラームは神学をどう受け止めていますか
70. ¿Cómo demuestra el Islam la existencia de Al-lâh? イスラームではアッラーの存在をどのように証明しますか
71. ¿Es Al-lâh como el Dios de los cristianos? アッラーはキリスト教徒における神のような存在ですか
72. ¿Los musulmanes piensan que Al-lâh se sienta en un Trono? ムスリムはアッラーが玉座に座っていると考えているのですか
73. ¿Tiene sentido hablar hoy día de la Ira de Dios y la Complacencia de Dios? 現代において神の怒りや寛容性について語ることに意義はあるのでしょうか
74. ¿Qué piensan los musulmanes del libre albedrío? ムスリムは自由意志についてどう考えていますか
75. La idea del *qadar*, ¿no hace de los musulmanes unos fatalistas? カダル（運命）の考え方からムスリムは宿命論者といえるのではないのでしょうか
76. ¿Cómo deben de tomarse las desgracias? 不運はどう受け止めるべきだとされていますか
77. ¿Cómo ven los musulmanes la muerte? ムスリムは死をどう考えますか
78. ¿Qué se piensa que hay después de la muerte? 死後には何があると考えられていますか
79. ¿Son acaso metáforas el Jardín y el Fuego? 「楽園」と「烈火」は比喻なのですか
80. ¿Cómo es el rito del enterramiento en el Islam? イスラームではどのように埋葬を行いますか
81. ¿Es *haram* la visita a los morabitos (tumbas de santos)? モラビト（聖人の墓）を尋ねるのはハラム（禁止事項）ですか
82. ¿Es el Islam una piedad privada? イスラームは私的な信仰ですか
83. ¿Por qué el Islam resalta la vida comunitaria en su vía espiritual? なぜイスラームでは精神性には共同生活が重要だとされているのですか
84. ¿Por qué las sociedades islámicas son “culturas de calle”? イスラーム社会はなぜ「通りの文化」なのですか
85. ¿Cómo viven los musulmanes la caridad? ムスリムにとって慈悲とは何でしょうか
86. ¿Cómo tratan los musulmanes a los ancianos? イスラームでは高齢者にどのように接しますか
87. ¿Qué actitud tiene el Islam para con la madre? イスラームでは母親にどのように接しますか
88. ¿Qué relación tiene el musulmán con los placeres de este mundo? ムスリムはこの世の快樂をどう受け止めますか
89. ¿Qué es el Bien y el Mal en el Islam? イスラームは何が善で何が悪ですか
90. ¿Qué actitud tiene el Islam con respecto al cuerpo? イスラームは身体についてどう考えていますか
91. ¿Por qué los musulmanes detestan la costumbre occidental de leer mientras hacen sus necesidades? なぜムスリムの人々は、用を足しながら何かを読むヨーロッパの習慣を嫌うのですか
92. Si lo que importa es volver a la naturaleza primordial (*fitra*) ¿por qué son necesarios los ritos? ¿No es suficiente vivir en la Naturaleza sin más? フィトラ（本然）に戻るこ

- とが重要だとすればなぜ宗教儀礼があるのでしょうか、自然や本質に生きるだけでは充分ではないのでしょうか
93. ¿Tiene hoy día algún sentido el sacrificio de animales que se hace durante la Fiesta del Cordero? 犠牲祭で羊の生け贄を捧げることに、現代でも意味があるのでしょうか
94. Cuales son las reglas de la alimentación en el Islam? イスラームの食事に関する規定は何ですか
95. ¿Por qué el Corán prohíbe el cerdo o el alcohol? なぜクルアーンでは豚やアルコール類を禁じているのですか
96. ¿Qué actitud tiene el Islam para con las drogas? イスラームでは麻薬をどう受け止めていますか
97. ¿Cómo ve el Islam su aceptación en forma de Sufismo dentro de la oferta religiosa de Nueva Era? ニューエージの宗教思想でイスラームが狭義のスーフイズムとしてだけ扱われていることについて、どう考えられていますか
98. ¿Cómo trata el *kufr* de destruir el Islam? クフル（隠蔽）はイスラームにどういった害を与えるのでしょうか
99. ¿Cuál es la esencia del Islam? イスラームの本質とは何ですか

CONTRAPORTADA

本書は、5年間にわたる「ウェブイスラム (Webislam)」での掲載内容の集大成にあたります。この期間にウェブイスラムに寄せられた質問は、誇張なしに何千という数にのぼりました。そこでの質問はムスリム以外の人々が関心を寄せるテーマについてであり、その中から本書ではテロリズム、女性器切除、投石刑、同性愛、人権、ベール、寛容性などに関する質問を取り上げています。イスラームに関する質問そして回答は数多くありましたが、最終的に明らかにしておくべき唯一の点は、イスラームとはひとつの生き方に過ぎないということです。ムスリムの人々にとって、アッラーとは私的領域に属するのではなく、ものごとの営みに関わる存在です。そしてイスラームは人生からかけ離れたものではなく生きている事実そのものであり、すでに存るものなのです。ムスリムは一生をかけて、それが意味することを見出そうと努めます。イスラームとは、それを通じて真の意味でこの世界に身を置くことが可能になるものです。ムスリムの人々の精神性は、四次元世界へのトリップではありません。それは、世界は単なる平面ではなく、そこに潜ってより深く生きられることを理解し、帰依をする人々が抱き続ける情熱なのです。

SOLAPA

アブデルムミン・アヤ アブベラフマン・ムハンマド・マナンに師事し 1985年にイスラームに改宗。哲学博士であり、日本の詩をスペイン語へ訳す翻訳家でもある。著作多数（下記）：

- *La poesía zen de Santôka (70 haikus esenciales)*. CEDMA. Colecc. Maremoto, Málaga, 2002.
- *El corazón del haiku (la expresión de lo sagrado)*. Mandala. Madrid, 2001.

- *Taneda Santôka: Saborear el agua (100 nuevos haikus de un monje zen)*. Hiperion. Madrid, 2004.
- *Libélulas, luciérnagas y mariposas (39 haikus japoneses)* [en bable]. Ambitu, Oviedo, 2004.
- *Expresiones visuales del castellano (usado en Andalucía)*. Geirin-shobo. Tôkyô, 2004. Edición bilingüe japonés-español.
- *El espacio interior del haiku*. Shinden. Barna, 2004.
- *Haikus japoneses de vuelo mágico*. Azul, Barcelona, 2005.
- *Haiku: la vía de los sentidos*. Novatores. Valencia, 2005.
- *Poetas de corazón japonés*. Celya. 2005.
- *El monje desnudo* (En imprenta). Miraguano, Madrid.
- *Ensayos de Metafísica Islámica*. Ed. Junta Islámica. Córdoba, 2001.
- *Islam para ateos*. Palmart, Valencia, 2004.
- *El secreto de Muhammad*. (En imprenta). Kairos, Barcelona.
- Libro de texto de la asignatura *Sociedad, Cultura y Religión* (1º de ESO). Editex. Madrid, 2004.